

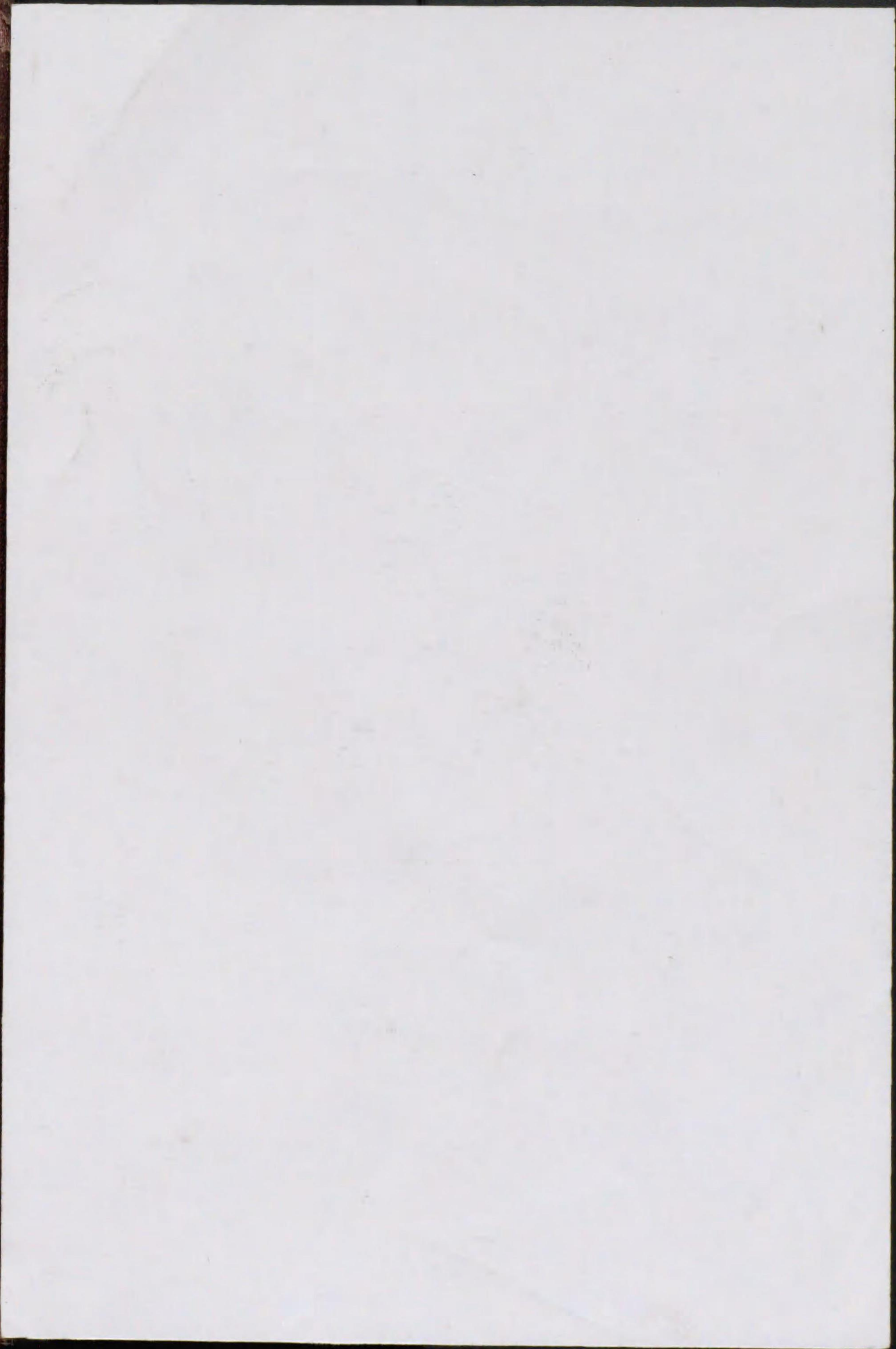
603-115



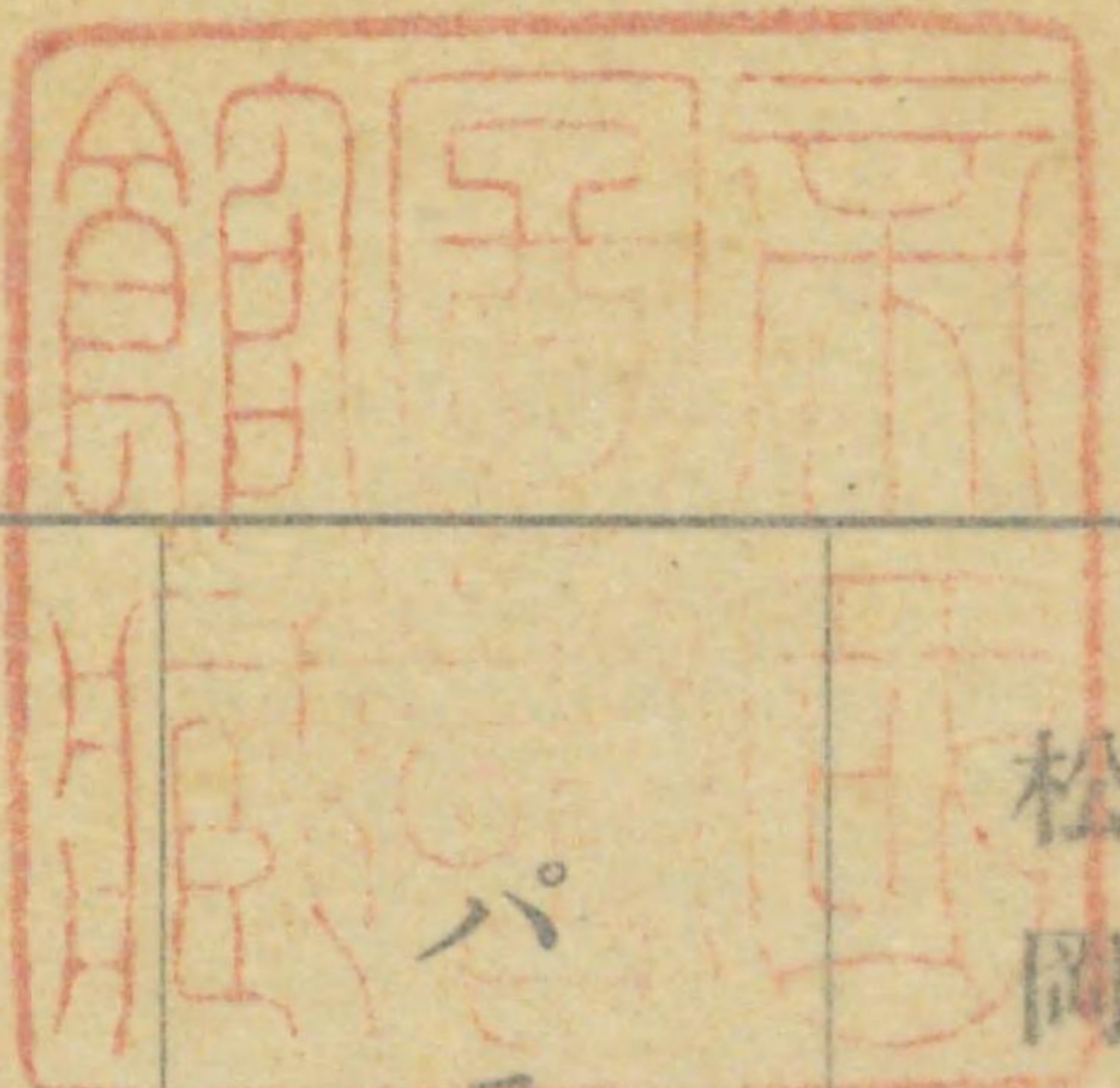
1200501530926

603

115



8 120

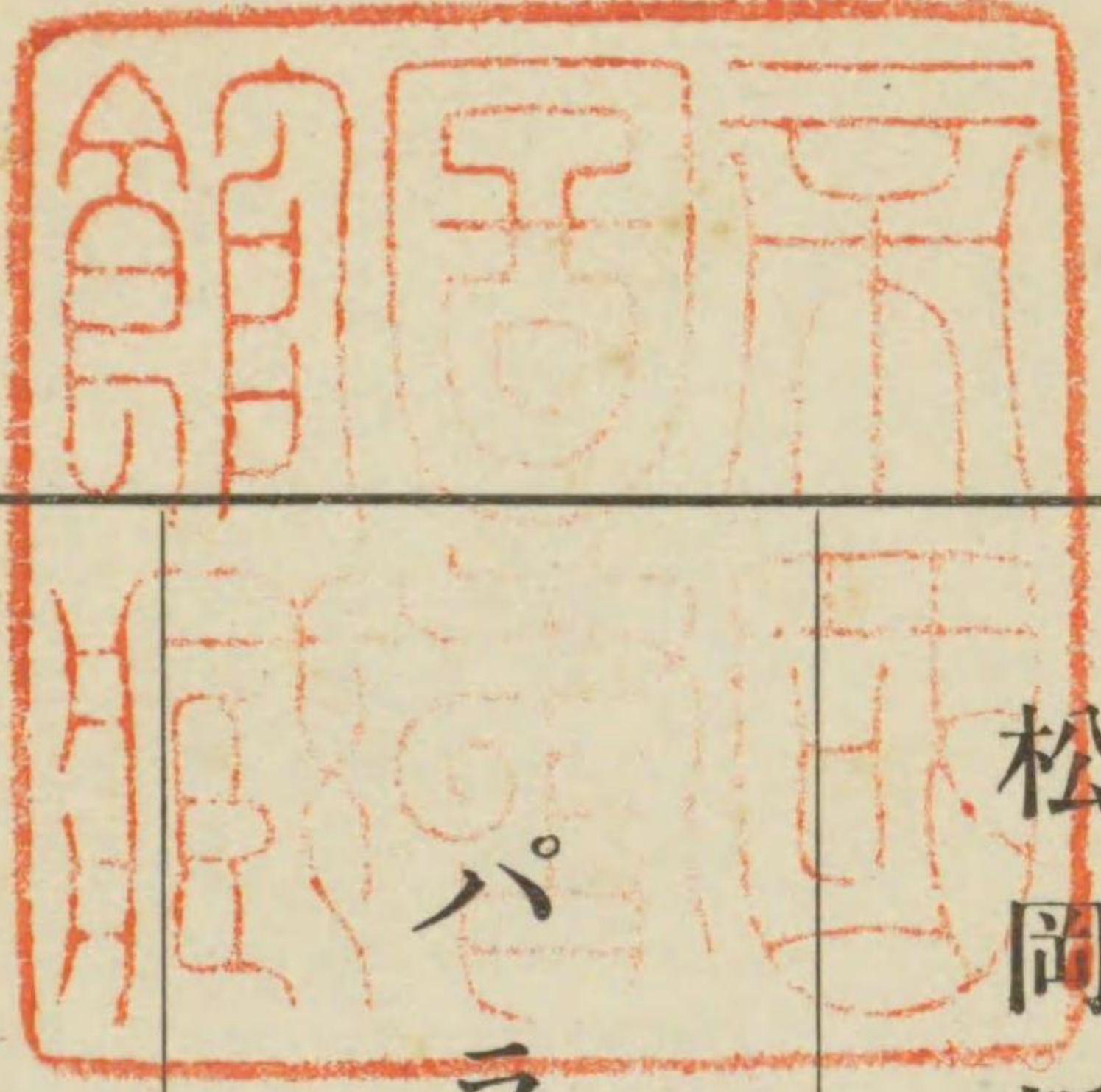


松岡 静雄 著

パラウ語の研究

東京 郷土研究社 刊





松岡
靜雄
著

パ
ラ
ウ
語
の
研
究

東京
郷土研究社刊



603-115

小序

- 一、本研究は南洋廳の援助によつて行はれたものである。
- 一、本篇は曩に發表した「チャモロ語」「中央カロリン語」「マーシャル語」の諸研究の姉妹篇で、今後遂行せらるべきポナペ語及ヤツブ語の研究と相待つてマイクロネシア語系の言語學的釋明が完成するのである。
- 一、上記諸語中パラウ語は最も難解とせられたのであるが、這般の研究によつて殘る所なく明にせられたことを欣幸とする。隣民族語との比較研究は本書の目的とする所ではないけれども、フィリッピン、マレー、メラネシア諸語の影響が明白に看取せられることは此島民の種族關係を考察する上についても一助たり得ると信ずる。
- 一、附録には成るべく多くの語彙を収録することに努めたけれども、此島民語の如く語頭變化の多いものに在つては原語原形の外に各變形をも羅列した詳密な

二
る辭書を備へねば實用上缺くる所がある。若し其必要がありとすれば命を待
つて更に編纂するつもりである。

昭和四年七月

著 者 識

目 次

緒 言	
第一章 音	六
一、語 音	六
母韻——子音——撥音	
二、音 便	三
韻通——音通——補音——約縮	
第二章 語構成	三
一、接頭語分子	三
二、接尾語分子	四
三、挿入語分子	六
目 次	一

四、疊 合……………四〇

第三章 語……………四三

一、名 詞……………四三

冠詞——數——性——格——慣用語法

二、形容詞……………四九

用法——階級——複數——名詞形

三、數 詞……………五五

基本數——常數——特別數稱——序數——倍數及分數——配當——不定數——

數量

四、代名詞……………七〇

(一) 人稱代名詞……………七〇

原形及諸變形——獨立形——連用形——接尾形(所有代名詞)

(二) 指示代名詞……………八二

(三) 疑問代名詞……………八五

(四) 不定代名詞……………八九

五、動 詞……………九〇

(一) 原形(語幹)……………九〇

(二) 終止形(動格)……………九四

語尾活用——語頭活用 a——語頭活用 b

(三) 過去形……………一〇八

(四) 受動形……………一三三

(五) 名詞形……………一二五

(六) 複合形……………一一〇

作為——方向——相互——指小——所有

(七) 時……………一三七

(八) 法……………一三三

目 次

命令——推量——假定——打消——疑問——希望及可能——受動——使動
六、副詞……………一四

固有副詞——諾否——場所——時——附記(月名、太陰の盈虧、潮の干満)

七、助語……………一六一

八、感動詞……………一六八

第四章 文……………一七〇

一、語の排列……………一七〇

排列様式——排列の順序

二、主語……………一七四

三、述語……………一七八

四、節……………一八一

五、複文……………一八四

文 例……………一八七

一、日常談片……………一八七

二、歌……………一九三

三、神話……………一九九

四、童話……………二〇三

附 録……………二〇五

一、他動詞表……………二〇七

二、語彙……………二一七

パラウ語の研究



緒

言

パラウは南洋廳所在地で、我が新領土たるミクロネシア叢島中最西南に位する一島群の呼稱である。行政的には其南方に粟散するソンソル、ブル、メリル、トコベイ諸島も之に包括せられるのであるが、こゝにいふパラウ語は主島たるパラウ本島、就中政廳所在地コロル島附近の言語の意で、僻遠の離島には別系の言語が用ひられ、パラウ島群中にも區々の方言が存することは勿論である。パラウ島民が親しく西洋人と接觸したのは一七八三年英船アンテロープが此地に於て難破した時に始まる。船長ウイルソンの遭難談はジョージ・キートによつて記述せられ（一七八八年刊行）、若

干の土語が収録せられて居る。其後も英艦船の此地に來航したものがあり、十九世紀の中頃には英人シェーンといふものが此處を根據として貿易を營んで居たが、言語學上には何等寄與する所がなかつた。一八六二年三月學術的探求の爲め來航し、約十ヶ月間滞在した獨人ドクトル・カール・セムペルは土語をも研究して其紀行「パラウ島」中に語構成に關する若干の説明を與へ、且獨逸人類學協會彙報(一八七一年度)に「パラウ語について」と題する短文を寄せた。其後十年おかれて此地に出現したゴードフロイ博物館派出員波蘭人ヨハン・クバリーも亦、民俗に關する其諸報告書中に多くの語彙を載録したが、惜しいことは音聲學上からも文法學上から十分の説明を與へて居らぬ。右の外一八八二年ライプチヒ市で刊行せられたガベレンツ及マイエル共著「メラネシア、ミクロネシア及パプア語の知識補遺」といふ書物の中にも若干の記述があるといふことであるが、私はまだ一覽の機會を得ぬので、其内容を詳にせぬ。さりながら此も亦上記諸書と同じく斷片的記事なることは疑がなく、まとまつた研究はワルレザー僧正によつて始めて遂行せられたのである。

獨逸天主教カプーツ^ニ派の教父 *Salvator Walliser* (後僧正に進級、ミクロネシア西部教區の監督に任ぜらる)は、パラウ在任三ヶ年の間に此民族語を研究し、左記の二業績を發表した。

1. Grammatik der Palausprach — Mitteilung des Seminars für Orientalische Sprachen an der Königlichen Friedrich-Wilhelm-Universität zu Berlin, Jahrg. XIV, Berlin 1911

11. Palau Wörterbuch, Honkong, Typis Societatis Missionum ad Exteros 1913 — 此書は

パラウ語對獨逸語、獨逸語對パラウ語の二部に分たれ、後半のみを別刷にしたものもある。

一九一五年米國テンネッシー州チャタヌガ大學教授 *Carlos Everett Conant* は米國東洋協會報第三十五卷に左記の小論文を寄稿した。

Note on the Phonology of the Palau Language

私は主としてワルレザー僧正の兩著に基き、セムペル、クバリー、コーナント等の諸書を参照し、旁らチャモロ、トラック、ボナペ、マーシャル等のミクロネシア諸語、マレー語、メラネシア語(就中ビスマーク叢島諸語)、フィジー語、マオリ語等と比較して研究を進めたが、其結果多くの點に於てワ僧正の説を覆さねばならぬやうになつたことを遺憾とする。師の文法は微に入り細を穿つ勞作ではあるが、其説く所に従へば極めて繁瑣不規則で、比較的頭腦の單純な島民が意のままに用ひ得べしとも思はれず、且いふが如き獨特の語法が隣接民族語とは無關係にパラウにのみ發達したとは

考へられぬことである。コーナント教授も指摘したやうに、其單語の多くは明にインドネシア系に屬し、地理的に考察しても外來者の影響を受けたことは疑のない事實で、唯種々の事情から形態に變化を來したに過ぎぬ。田毎に影は宿しても空行く月は一つであるから、眞如の姿は雲霧を拂うて窺はねばならぬ。ワ僧正が多岐多端端睨すべからざるものとしたのは恐らくは次の原因によるものであらう。

一、聲音學的研究の足らなかつたこと。——助語エルをelとerとの二語に分けて説いた如きは其一例である。

二、語構成に注意を拂ふことが少かつたこと。——ア(若)、マ(爲)、ラ(去)、ル(之)等が接合分子であることに氣づかなかつたやうである。

三、動詞の終止法の一形(頭活)を原形又は基本形と誤認したこと。——其結果動詞の活用は極めて不規則奔放であるかのやうに説かれた。

四、西洋語就中獨逸語の文法に當て嵌めて説かうとしたこと。——關係代名詞、現在及過去分詞等の存在を主張したのは之が爲とせねばならぬ。

(一)と(四)とは通俗的に外國語を説明する場合に起る通弊で、我人共に免かれぬ所であるが、世界の言語は必しも同一源から出たものではないから、一民族語の語音と語法とを以て他の民族語を律することは出来ぬ。殊に東洋語はインド・ゲルマン語とは殆ど無關係に發達を遂げたものゝやうであるから、之を考察するに當つては其獨自の原則を發見する事に努力せねばならぬ。私がワ僧正の業績に多大の敬意を拂ひ、且之を根據として研究を進めたにも拘はらず、記述の様式に於ても説明の方法に於ても少しも之に捉はれることなく、獨創の見解によつて立論したのは之が爲である。

本書中には既刊の「チャモロ語の研究」「中央カロリン語の研究」「マージナル語の研究」中に述べた議論は再録せず、必要に臨みて前記三書の参照頁數を註記するに止めた。之が爲にはチャモロ語にch、中央カロリン語にはk、マージナル語にはmといふ畧字を用ひた。

第一章 音

一、語音

パラウ語に於ても、他のミクロネシア諸語と同じく、各音節は母韻を以て終ることを原則とし、ng音を連結する場合の外、閉音節と名づくべきものはない。換言すれば子音は獨立することなく、常に母韻を伴うて一語音(音節)を形成するのである。此やうな語音を寫すには我カナが最も適切で縦ひ原音に吻合するものでないとしても、最も便宜であることは何人も異議があるまい。カナを用ひて表示すると、パラウ語の語音は畧々左の通りである。——便宜の爲めローマ字を以て子音を添記する。

カ	ア
キ	イ
ク	ウ
ケ	エ
コ	オ
	ク

ラ	マ	バ	バ	ナ	ダ	タ	サ	ガ	ガ
リ	ミ	ピ	ビ	ニ	ヂ	チ	シ	ギ	ギ
ル	ム	ブ	ブ	ヌ	ヅ	ツ	ス	グ	グ
レ	メ	ペ	ベ	ネ	デ	テ	セ	ゲ	ゲ
ロ	モ	ポ	ポ	ノ	ド	ト	ソ	ゴ	ゴ
				ン					
	l, r	m	p	b	ng	d	t	s	kh 又は ch
									g

即ち國語の語音と頗る近似し、五母韻及或る子音が之と結合した五十五語音並にンから成立する(通計六十一語音)。左に其特色を述べる。

母韻。發音に長短伸縮があり、又後記の如く音便による變化が起ることもあるが、母韻は表記

の五種に限られ、複母韻は存在せぬ。——稀にイッといふ韻が用ひられるやうであるが、正規の母韻ではなく、寧ろ訛音と見るべきである——其故に母韻が重疊する場合には別々に之を發音する事を要する。例へばアイゲイ(其等)は *ai-gei* と明白に四音節に區別せられるのである。但し弱いア韻がオ韻につづく場合には前續音に攝せられてオーと發音せられる。例

トゴール(トゴアルの約) 煙草

クレゴール(クレゴアルの約) 遊戯

母韻が極めて短く發音せられる場合には其響は極めて曖昧であるが、多くはフランス語の de と同様に、ウ韻に近く聞える。k, g, s, t, d, m, l, r, ch 等の子音が獨立し、若くは閉音節を形成することがあると誤解せられたのは之が爲であるが、其實は母韻が極度に短縮せられた結果で、例へばマ(爲)がラ(過去語分子)と結了する時はムラ(完了)となり、ゲル(問)といふ語を活用する場合にはグリイル、グレル(名詞形)ともなるのである。されば接合又は結合に際し、原母韻が姿をあらはす場合も少くはない。例

ルムク 沈黙——リルク〔過去形〕

ガヅ。 人——ガダク 我人

メン 密閉——ベノエル〔分詞形〕

シセバルル 入口——シセベルレル 其入口

子音。 カ(ガ)、タ(ダ)、バ(パ)、マ、ラ行の發音は畧々國語と變りはない。ことにダ行のヅの如きは邦音と同じくズに近く聞える。——キートは th をあてた——ラ行は西洋子音の r, l 兩様に發音せられるが、本質的に區別があるわけではなく、口調による差異に過ぎぬ。西洋人は嚴重に之を區別して轉寫しようとする結果、同一語を二様にかきわけ、之に拘泥して誤解を招いた例も少くはない。右の外ガ行、サ行、ナ行については聊説明を必要とする。

サ行はマーシャル語のジャ、ポナペ語のジャに相當する音で、パラウに於てもウ母韻の前後及ルの後につづく場合にはシャ行に聞えることがある。例

オウセスアウ——オウシ。エスアウ 口笛を吹く

ゲドルルス——ゲドルルシユ 便々たる(吐)

本書に於ては簡畧を期する爲に特に音符上の區別を施さぬことにした。

ナ行はngを子音とし、鼻にかけて發音せられるから、他の諸島語の音譯例に倣へばゴチック字を以て表現すべきであるが(ch九頁、k七頁、m七頁)、パラウに於てはg音は殆ど響かぬので、セムペル、ワルゼー兩氏も往々之をnと轉寫して居るのみならず、普通のナ行即ちnを子音とする語音は存在せぬから、便宜の爲めゴチック字を用ひず、尋常のナ行の假字^{カナ}を以て表示することにした。

鼻音はナ行ばかりではなく、ク、ツ(ヅ)の二語音も亦鼻にかけて發音せられることがある。之を標識する爲にはヌを右下旁に細書してクヌ、ツヌ、ヅヌとするが、之は特別の語音ではなく、或る場合に限つて用ひられる一種の訛音であるから、同一語でも他の形に在つては直音に復元するのである。例

クヌメヅ 近し〔形〕——キレヅ〔過去形〕——ケヅ 近〔名〕

ツヌミネト 栓する〔複〕——チネチ 同〔單〕

カ行には清濁二音の外に喉音がある。即ちkhを子音とするもので、kが強く響く場合にはカ行に聞えるが、h子音が勝つとア行に近くなる。其故に婦女子は多くは弱い出氣音h若くはア行に發音するのであるが、成人の男子は嚴にk音を存するので、キートはcを以て之を表示し、セムペルは

c又はkを用ひ、クバリーは常にkと書き、ワルゼーはchを之に充當し、コーナントは發音符字xをあつべきであるというた。本書に於ては便宜の爲めカ行の假字^{カナ}に半濁點を施したものを以て之を標識する。例

サガル 男、雄、 グテム 土、土地

ガ行にも亦之に相當する喉音が存したのであらうが、今では尋常の濁音のみを用ひる。ガ行が後記の如く音便によつてガ行(g)又はナ行(ng)に轉呼せられるのは之によるものである。

撥音。 撥る音はン(ng)一種で、他の語音と結合して閉音節を形成することもあるが、本來は一個獨立した語音であつたらしく、語頭に位置する例もあり、同一語がンにも、ナ行の他の語音にも轉呼せられることがある。例

ンリイル 狭心症

ナクル 名——ンクレル(又はネクレル) 其名

ニルミ〔尾活〕 飲^レ之——ンリム〔過去名詞形〕

ンミルル 脱落——ニリルル〔過去〕

促音はパラウ語に於ては極めて稀である。

二、音 便

單語就中活用言の變化は次章に述べるやうに主として語分子の接合又は挿入によつて行はれるのであるが、其際甚しく音韻が轉呼せられるので、殆ど形態を一變することがある。さりながら決して出たために轉訛するのではなく、仔細に研究すると若干の準則を求めることが出来る。之を音便と稱へるのであるが、音便を用ふべしや否や、何種の音便に適從すべきかは全然發音の便宜によるものゝやうである。以下韻通(同行變化)、音通(同列變化)、補音、約縮にわけて記述する。

韻通。ア、イ、エ、オの各母韻が極めて短く發音せらるる場合にはウ韻に轉ずることは上述の通であるが、其他の場合に於ても五韻は常に相通である。就中アがエ、ウがイ、オがエとなることが多いのでワ僧正は之をウムラウトと見なし、ä、ü、ö韻の存在を説いたが、同師自身もäとeとを混用し、ü、öの知きは希有の例に屬する所を見ると、寧ろ單純なる音便變化若くは訛音と見るべきである(第七頁參照)。

此音便は近い韻に轉ずるといふことの外には定則は存せぬものゝやうであるが、過去語分子ラは常に前續母韻の類化によつて變轉する。例

マ 爲——ムラ(マ、ラ) ズム 出現——デルム(ヅ、ラ、ム)
メイ 來——ムレイ(メ、ラ、イ) モン 行——ムロン(モ、ラ、ン)
イゴン 往——イリゴン(イ、ラ、ゴン)

音通。濁音ガ行、ダ行及パ行は本來音便として發生したもので、カ行、タ行、バ行との間に本質的の區別はない。其故に同一語が時としては清音(及バ行)にも濁音(及パ行)にも發音せられることがある。此變化はことに接合の場合に多く現はれる。例

カルツ 焔——オメガルツ 點火
ケルモルモ 擽——メゲモルム 被_レ擽
デルケ 尙——デリガク 尙未
デブ 甘蔗——テブ「セムベル」
バヅ 石——パヅ「セムベル」

プイエル 月——プイエル〔キート〕

右の外發音口位の近い語音は同列に於て相通じて用ひられる。即ち

(イ) タ(ダ)行とラ行。例

デル 釘——デレル(デデルの轉呼) 釘着する

トブチ 脱殻——メラプト〔終止形〕

(ロ) ナ行とラ行。例

ヌケヅ 罰金——メルケヅ 罰金を拂ふ

ネルヅ 引上綱——メレルヅ 引上げる

(ニ) タ、^(此)チア、^(行)モの如き語が獨立して用ひられる場合、タン、チアン、モンとなるのも接尾語ル

(第三七頁參照)の轉化であらう。右の外ラ行がナ行に轉ずることは希有である。

(ハ) バ行とマ行。例

ベセベス 束帶——メセベシ 纏捲する

ベシイク 裝飾——メシイキ 飾レ之

動詞の未然形(第一四〇頁)に於て屢々マ行がバ行に轉ずるのも此音便によるものであるが、兩者いづれを原形とすべきか判明せぬ場合がある。

(ニ) ム(メ)とウ(オ)。例

ムデルニ 覆ふ——ウデルナルル 被覆

メサン 見る——オソネル 見ること

上記四様の音便は國語に於ても行はれるが、パラウ語には尙次の如き特異の音便がある。

(ホ) ガ行は既記の如く子音を失うてア行となることの他に(第一〇頁)、カ行、ガ行、ナ行とも相通する。例

オウ又はゴウ 所有を表示する接頭語

カ又はガ 相互を意味する接頭語

セゲ又はセゲ

ペゲ又はペゲ

傾向、素質、順應等を意味する接頭語

ゴノス又はオノス 東、東風季節

ゲセゲセマルル 穢——メネセグスム 穢す

(へ) カ行、ガ行の語音もまたメを冠して終止形とする場合にはナ行に轉ずる。例

ガン(ガル) 食物——メナン 食ふ

キヂタイ 高——メニヂダイ 高くする

クロウ 大——メンロウ 大きくする

ゲセゲン 子守唄——メネセゲス 寝つかす

ナ行にはg音が含まれて居るから、此音便變化を起したものと説明し得られるが、恐らくは接頭語分子メを冠する爲にン音を補ひ、カ(ガ)行と連約したのであらう。——後記補音の項下参照。

(ト) 右の場合サ行の語音はラ行に變化する。例

サイス 虱——メライス 虱を取る

スイス 火吹竹——メルイス 火を起す

セルス 垣——メルレス 圍む

補音。パラウ語に於ては後章動詞の項下に記述するやうに過去分子ラ(去)、活用語分子マ(爲)を語中に挿入する事があるが、此は音と共に意義をも補ふものであるから、音便と見なすことは出来ぬ。之に反して左記の場合は意味に於て何等増減する所のない純然たる補音である。

(イ) 子音ng。母韻を以て始まる單語には往々ng音を補うてナ行の語音とすることがある。之はパラウ語の特色で、恐らくは冠詞アを用ひる爲に起る母韻の重複を避けたのであらう。ナ行を以て始まるものは多くは之に屬するやうであるが、原語を詳にせぬものが多い。左に語原の略と推定し得られるものについて若干例を擧げる。

ナク 我——(インドネシア) アク

ナル 在——(マーシャル) アル、オル (有)

ナルク (ルはナの音便) 子——(インドネシア) アナク

ナウ (ウはブの音便) 火——(インドネシア) アプイ

ノバルヅ 西——(フィリッピン) アバガヅ (南)

ヌイッス 蛇——(フィリッピン) ウレグ

ニゲル 魚——(インドネシア) イカン

然るに接合又は結合に際して此補音は極めて判然とあらはれる。例

ゴレセネク(ゴレス・^(小刀)アク) 我小刀

イドクル「形」^{キタナ}穢し——メニドクル 汚す

デル 残餘——デレネル「疊語」

オエオン「原形」——ウネウル「尾活」 越行

又母韻を以て始まる語にあらずとも接頭語分子と連繋の爲め、ン又はナ行の語音を挿入することがある。例

ドンゴクル 滞在——メネドンゴクル 抑留する

(ロ)子音k又はg。此兩子音も亦語頭又は語中に補はれることがある。恐らくは右のng音の轉

訛であらう。例

イヅ 自他稱代名詞(我汝)——キヅ 同上獨立形

イイクル(外)——キイクル 背中合はせ

メスガク(メス・^(與)アク) 我に與ふ

右の外使動を表示する爲にオメの代りにオメグといふ語分子を用ひることがあるが、グに使役の意はないやうであるから、尋常の活用語分子と區別する爲にg音を補うたのであるかも知れぬ。

(ハ)子音l。原形がオを以て始まる動詞の頭活形(終止形)はオの次にラ行の語音を補うて表示せられる。例

原形	オ・ケツ ^(近)	頭活形	オレケト	近寄す
原形	オ・セベク ^(飛) (スエベク)	頭活形	オルセベク	飛ばす
	オ・ツト ^(乳)		オルツト	授乳する

メを接頭する場合に於ても亦l音を補ふことがある。例

原形	エアクル	頭活形	メレアクル	分離する
	イエル		メリエル	巻く

約縮。單語又は語分子が結合又は接合せられる場合には、上記普通(就中連濁)、韻通、補音が行はれる外に、語音の約縮せられることが少くはないが、必しも反切の法則によるものではなく、其

様式が區々であるので、結合語と推定しても之を分析し得られぬ場合がある。例へばカルネバルヅといふ語は輸入植物を意味し、棉、鳳梨等アナナスも之に含まれるが、ワ僧正の註記によればガール エル (食物) (の)アノバルヅ(西詳)の約であらうといふことである。又ガルデベゲル(組合)といふ語にはガ(相)及キデブ(集合)といふ語分子が含まれて居るものと思はれるが——セムベルはグレプベルゲルと轉寫した——語尾分子を詳にせぬ。他日之に關する準則が発見せられたら、語義、語原も一層明白になるであらうと思ふが、即今舉示することの出来るものは次の一則があるのみである。

マ行の語音が二つ重なる場合には其一を省き若くは後續語頭をア行の語音にかへる。例

ムギウアイウ(馬)・メギウアイウ(眠) 眠りなす

コム(若) エサ(見)(メサの轉) 若汝が見るならば

第二章 語構成

凝着性なるパラウ語は他のミクロネシア諸語と同じく少數の原語を本とし、之に他の語又は語分子を結合することによつて構成せられるのであるが、上記の如く音便變化が甚しいので、十分に熟合したものに在つては還元することの出来ぬ場合が多い。唯若干の語分子は常に原語に接着して原義に多少の修飾を加へる爲に用ひられ、比較的辨別が容易であるから、本章に於ては主として之を説く。此等の語分子も亦本來は一定の意義を有する單語であるが、或は獨立を失ひ、或は轉義したものであるから、便宜上其接合位置によつて之を接頭語分子、接尾語分子及挿入語分子に分類し、外に同一語又は語分子を重疊して語義に修飾を加へるものを疊語と稱へて項を分つて記述する。

一、接頭語分子

接頭語分子には他語(又は語分子)と熟合して一語をなすものと、或る單語の語頭に冠せられ、場

合によつては分離して用ひるものがある。例へばメガブ(灰色の)、メンロウ(大きくする)はメ(爲)とガブ(灰)又はクロウ(大)とが結合したものであるが、熟合して一單語と見なされ、假定代名詞アレ(若彼)、動詞マメギウアイウ(眼りなす)は各々獨立した複合語であるが、之を連用する場合にはアレマメギウアイウとはいはず、アバレ(若)マレ(彼)の轉呼)メギウアイウ(若し彼が眼りなさば)といふのである。されば嚴密にいへばメガブ等のメは語分子で、後者のア、マは接頭性單語であるが、便宜の爲め一列に見なし、後者を分離的語分子として之を區別する。

左に主なる接頭語分子を列挙する。——「」内に註記したのは被接合語の品詞別である。

ア〔名〕。後述の如くアは冠詞とも助語とも見なさるべきものであるが(第四三頁、一六二頁)、事物の名稱の如き具象的名詞、就中母韻を以て始まる語に在つては殆ど不可分で、接頭語分子の觀を呈する。例

アウドウヅ 珠貨 アムライ 舟

ア〔代〕——分離的。アはチャモロ語では「或」、マーシャル、マオリ語では「然れども」といふ意に用ひられるが、パラウに於ては「若」假令の意を以て接頭語分子として代名詞と結合し、假設條件

を表示することは次の代名詞の項下に詳述する通である(第七四頁参照)。——獨立形としてはアル又はアレとなり、其他アルコン、アクモモン、アムコン(假令)などいふ語が之から派成せられた。

——第三章助語の項下参照。

イ、イエ〔代〕。マーシャル語のイと同じく原義は「此」であらうが(m六九頁)、接頭語としては人代名詞及指示代名詞に冠して意を強めるに用ひられる。例

イ・ナク <small>(我)</small>	此の我	イ・カウ <small>(我)</small>	此の汝
イ・ニ <small>(彼)</small>	此の彼	イ・チルガン <small>(此等)</small>	正に此等(人)
イエ・ニガン <small>(此)</small>	正に此(人)		

ウ〔動〕。後記のオと同じく動詞(他動及使動)の活用を表示する接頭語分子で、單數一人稱にのみ用ひられる。恐らくはチャモロ語の活用語分子フ(ch四一、五一頁)の變形で、本初は主語たる代名詞と述語とを介する連繫語であつたのであらう。——次章動詞終止形の項下参照。

ウル、ウレ〔名〕。屑滓殘留物の意を表示する。——國語のウル(餘潤)と類似して居るが、同源と斷定することは困難である。——例

ガルル 食物——ウレナルル 食ひ残し
 デソネル 切斷——ウレルソネル 切り屑
 ネバゲル 刮削——ウルレベゲル 削り屑

オ〔動〕。上記ウと同じく動詞の活用を表示する。此語分子はチャモロ語、中央カロリン語の接頭代名詞諸形(ch四一、五一頁、k四六、八四頁)と同一性質のものと思はれるが、一人稱單數を除いてはすべての人稱に適用せられ、——次章動詞終止形の項下参照——時としてはよく熟合して不可分の單語を形成することがある。例

オラブ 受 オベス 忘

オウ〔動〕。「所有」「行使」を表示する語分子で、其意味を被接頭語に加へる。例

ピリス 犬——オウピリス 犬を有する
 マラン 誠——オウマラン 信用する
 レン 心——オウレン 配意する

カ、カカ〔動〕〔名〕。「相互」を意味し、音便によつてカウとも用ひられる。——ガ、ガルとも轉呼

することは後記の通である——例

オコアツ 毆打——カコアツ 格闘
 トゴイ 言語——カテゴイ 語り合ふ
 サウ 愛好——カウサウ 相愛
 オレセネウ 助ける——カカエネセウ 相互扶助

クル、クレ〔形〕。形容詞から抽象名詞を作る爲に接頭せられる。例

キデダイ 高——クルデダイ 高きこと
 クロウ 大——クルロウ 大なること
 ゲゲレイ 小——クレゲレイ 小なること
 ウニル 善——クルニアオル 善きこと

前二例によれば此クル(クレ)は或は複合語分子で、クは國語のカ(ケ)と同じく形容語分子、ルは後記の名詞形を表示する接尾語分子(第三七頁)であるかも知れぬ。パラウ語の形容詞にカ(ガ又はガ)行の語音を以て始まるものが多いのは之によるものであらう。

ゲク〔數〕。重複を意味する語分子で、數詞に冠して用ひられる。例

グク タン(二) 更に一つ グク ベビル(若干) 更に若干

ガ(ガル)〔名〕〔動〕。上記カ(カウ)の轉呼で、同じく「相互」を意味する。——ゴとも轉呼せられる

ことがある。——例

ゴレベツ 打擲——ガゲレベツ 撃合

ヂル 婦人——ガヂル 母

ガヅ 人——ゴガダク(我) 我同胞

ブルグ 腫物——ゴブルグ〔形〕 腫脹

ゲ(エ)〔數〕。ゲは國語の一ツ、二ツ等のツにあたる語分子で、原數に接頭して用ひられる。例

オルン 二——ゲルン 二ツ

オアン 四——ゲオアン 四ツ

ン又はルといふ語音が先行する場合には此ゲはエと轉呼せらる。例

ン エルン 其は二ツ(である)

ン エオアン 其は四ツ(である)

ゴ〔動〕。終止形の語幹に接頭して其意味の事物又は工具を表示する。恐らくは後記ゴウの變形で

あらう。例

メニイル 待つ——ゴニイル 期待

メルプス 灌ぐ——ゴルプス 灌溉水

メレス 切る——ゴレス 小刀

メロゴロク 鋸斷する——ゴロゴロク 鋸

「相互」の意のガも亦ゴと轉呼して用ひられることは上記の通である。

ゴウ〔名〕。前出のオウと同語で、「所有」の意であるが、名詞を作るに用ひられる。例

ブラルラン 段階——ゴウブルラン 段階の開孔ウヘを有する筈

ゴウ(オウ)、ゴウネ(オウネ)〔數〕。「約」の意。略數を表示するに用ひられる。ンといふ語音が先

行する場合にはオウ、オウネとなる。——例は次章數詞の項下にあげる。

ゴネ〔數〕。序數を表示する語分子で、第二、第三等の「第」にあたる。ンに續行する場合にはオウ

となること前號ゴウと同様である。——次章數詞の項下参照。

セゲ(セゲ)〔名〕。形容語分子で、名詞又は動詞原形に接頭して傾向、素質、適應性を表示し、後

記の如くペゲ(ペゲ)とも用ひられる。例

ゲル 質問——セゲレゲル 好奇なる

ネミアクル 攀登——セゲネミアクル 木登に巧なる

メキウアイウ 眠——セゲイウアイウ 嗜眠の

ヂ〔形〕。原義を詳にせぬが、メ又は母韻を以て始まる形容詞に在つてはヂを冠して複數を表示する。例

メサナガヅ 瘡——ヂメサナガヅ

ウニル 善——ヂウニル

「唯」の意のヂも亦指小動詞等に在つては接頭語的に用ひられるが(第一二八頁)、此語分子とは語原を異にするものゝやうである。

テ〔數〕。人數を計へるに用ひる語分子で、人代名詞第三人稱テ(彼等)と同語から分化したものと

思はれる。國語ヒトリ、フタリのりに相當するが、「一人」といふ場合には用ひられることなく、且之を接頭することを異りとする。——次章數詞の項下参照。

デル、デルセ〔數〕。國語のヅツ(宛)にあたる語分子で、原數に接頭して「各其數」といふ意を表示すること次章數詞の項下に例示する通である。デルの本義は「餘」で、セは恐らくはセセイ(少)の語幹であらう。

バ、ベ、ボ。後記のマ、メ、モは音便によつてバ行に發音せられることがある。之に反して多數を意味するベがメと轉呼せられて接頭語分子に用ひられることは後述の通である。——前章音便の項下参照。

ペゲ(ペゲ)〔名〕。上記セゲ(セゲ)と同じく、傾向、素質等を表示する形容語分子であるが、果し

て同語から分化したものであるか否やを詳にせぬ。例

バウ 臭——ペゲバウ 有臭

ラトク 記憶——ペゲラトク 記憶のよい

ゴポヅ 香料——ペゲゴポヅ 香のよい

オレネス 聞——ペゴデレネサクル 耳の聴い

マ(バ)〔動〕——分離的。 マはチャモロ語に於けると同じく、「作爲」を意味する原語で、單獨では用ひられぬが、動詞に接頭して國語の爲ス(英語のdo)と同様の語法を表示する。例

メギウアイウ 眠——マメギウアイウ 眠りなす

メニタクル 謠——マメニタクル 謠ひなす

此マは否定及假設法に用ひられる場合にはバと轉呼せられ、動詞から離れて先行代名詞に接頭せられること後章代名詞及動詞の項下に述べる通である。

メ(ベ) (二) 上記マの變形で、原義は作爲であるが、左記の三用途に充てられる。ベは其音便である

(一) 名詞に接頭して形容詞を作る。例

ケサイ 少許——メケサイ 僅なる

ガス 煤——メガス 煤けたる

セス 勤勉——メセス 勤勉なる

テウ 幅員——メテウ 廣し

(二) 名詞に接頭して他動詞の原形を作る。——此場合にはムとも轉呼せられることがある。例

ギナル 座席——メギナル 据

シウル 舵——メシウル 操舵

ナクル 名——ムナクル 命名

之を頭活終止形として用ひる爲には更に上記のオを冠してオメギナル、オメシウル、オムナクルの如く稱へる。

(三) 名詞及形容詞に冠して他動詞(又は使動詞)の活用を表示する。次章動詞終止形の項下参照。

——例

サクト 紐——メサクト 縛着する

トゴイ 言——メレゴイ(レはトの音便) 談話する

クロウ〔形〕 大——メンロウ(ンは音便) 大きくする

キヂダイ〔形〕 高——メニヂダイ(ニは音便) 高くする

メ(ニ)〔形〕。 形容詞の複數を表示するに用ひる。恐らくはベトク(多)の語幹への轉呼であらう。比

較的表示のペイ(第五一頁)と同原から出たものと思はれる。例

クロウ 大——メクロウ〔複〕

ゲゲレイ 小——メゲゲレイ〔複〕

メ〔三〕〔動〕——分離的。「此方に来る」といふ意の動詞メイの語幹で、分離的に他の動詞に冠して動作行為の方向を表示する。——次章動詞複合形の項下参照。例

メギウアイウ 眠——メメギウアイウ 眠り来る

メニタクル 謡——メメニタクル 唄ひ来る

モ〔動〕——分離的。「彼方に行く」といふ意の動詞モンの語幹で、右のメと對立して動作行為の方向を表示する。否定又は假設語法に在りては動詞から離れて先行代名詞に接頭することも亦マ、メと同様である。例

メギウアイウ 眠——モメギウアイウ 眠り行く

メニタクル 謡——モメニタクル 謡ひ行く

此活用については次章に詳述する。イゴ(其方に行く)といふ語も同様に用ひられるが、他語(又

は語分子)に接合せられることはなく、單に前置せられるのみである。——又メ、モ、イゴと上記のマとの複合したマメ、マモ、マエゴの形を用ひることもあるが、用法に於ては大差はない。モは亦轉義により「成る」といふ意の接頭語分子としても用ひられる。例

ビバク 多——モ・ビバク 多くなる

ゲベグブ 俯伏——モ・ゲベグブ うな垂れる

受動形を表示する爲にメ(ム)を接頭するのも恐らくは此モの轉呼であらう。——次章動詞の項下参照。

ル(レ)〔名〕。呼格又は愛稱を表示する爲にルを接頭することがある。例

ナルク 子——ルナルク 子供よ

ゴニスモグ 義兄弟——ルニスモグ 愛する義兄弟

此ルは他のミクロネシア諸語のリ(レ)と同じく、「人」の意の原語であらう。村(ベル)人をレゲベルといふのも同語から出たものと思はれる。——ゲは補音である——パラウでは餘り多く用ひられぬが、之に冠詞アを接頭したアルは人又は人々の意を以て他語と連用せられる。例

アル ベラウ パラウ島人

アル メアウ(裸、無位) 平民

此用法から更に一轉して人及動物の複數を表示する冠詞としてアに代用せられる事がある。例

アル ガヅ(人) 人々 アル ニゲル(魚) 魚類

二、接尾語分子

パラウ語に於て最も多く出現する接尾語分子は代名詞の一形で、被接合語が屬格に立つことを表示するには常に之を用ひ、與格、目的格も多くは接尾形代名詞によつて表現せられ、就中第三人稱單數イ(イル)は動詞の活用を表示する一形式と見なさるべき場合もあるのであるが、之が説明は次章代名詞及動詞の項下に譲り、こゝには其以外の接尾語(語分子)のみを列擧する。

アン〔動〕。 ガンとも用ひられ、いづれを原語とするか、其原義如何は尙之を詳にせぬが、動詞に接尾して動作行爲の開始を表示する。例

オレネス 聞——ロネサン 聞き始める

モン 行——モガン 行き始める

ウオ(ン)〔數〕。 長形の物品を數へる爲に常數に接尾して用ひる語分子で、國語の「本」にあたる。

恐らくはウアト(柱)と同原から出たのであらう。例

ゲデイ 三——ゲデイウオン 三本

ゲデイウオ^(三本)ル^(の) ゲルレガル^(木) 三本の木

ウン〔動〕。 グン、ゲンとも用ひられ、上記アン(ガン)と關係があるものと思はれるが、尙原語、

原義を詳にせぬ。動詞に接尾して其動作行爲の將に起らむとすることを表示する。例

オレネス 聞——ロネスン 將に聞かむとする

モン 行——モグン 將に行かむとする

エイ(ネイ)。 後記ンと同じく動詞、形容詞等の語幹に接着して獨立形を作るに用ひられる語分子で、恐らくは接尾代名詞イ(第三人稱)から轉化したものであらう。ネイとなるのは補音の爲である。例

メガス〔形〕 黒塗の——メゲセイ ア^(心)レヌク 驚慌

ビバク〔形〕多——ビベクネイ 増加

モン(行)に對立するメイ(來)、チアン(此)に對立するセイ(其)も亦メ、セに此語尾が添付せられたのである。ワ僧正が之を突如急速なる状態を表示するものと説いたのは其根據を詳にせぬ。

エゲト(ン)〔數〕。匾平、葉形のものを數へる場合に常數に接尾する語分子で、國語の「枚」「葉」に當るものであるが、尙原語を詳にせぬ。例

ゲデイ 三——ゲデイエゲトン 三枚

ゲデイエゲト (三葉) ル ア (椰子葉) ヅイ 椰子葉三枚

ギヅ〔代〕。強意の爲め指示代名詞に接尾する語分子で、例へばチア(此)をチアギヅといふが如く用ひられるが、尙原義を明にせぬ。——次章指示代名詞の項下參照。

ゲン。——上記ウンに同じい。

ゲル。原義は「問」であるが、「何處」といふ意に轉じ、接尾的に用ひられる。例

(在) ナル・ゲル (何處) 何處に (行)(何處) モル・ゲル 何處へ

ガン、ゲン。——アン、ウンを見よ。

ン。 第三人稱代名詞であるが、或る種の語幹に接着して獨立形を作るに用ひられる。其故に此等の語幹が接頭的に用ひられ、若くは助語ル(エル)等を介して他語と連用せられる場合にはンは消失するのである。例

アタン 一——タ (二) ル (百) ダルト 一百

チアン 此——チア (此) ル (物) クラロ 此物

タガン 誰——タガ (誰) コム (若)(汝) シイキ? 汝が求めるのは誰か

キロン 殆——キロク (殆)(我) マヅ 我死なむとす

モン(行)、イゴン(往)等のンも亦之に屬する。

ル。 獨立して用ひられる場合には連繫助語と見なされるが、接尾語としては動詞の語幹に連結して國語のコトと同じく抽象名詞を作るに用ひられる。例

キデブ 集——クデベル 集むること

オレネス 聞——オロナサル 聞くこと

他動詞は皆此形を備へて居るが(次章動詞の項下參照)、音便による變化が甚しく、原形から直に此

形を導くことの出来ぬ場合もあるから、附録の他動詞表に之を列挙した。

三、挿入語分子

嚴密なる意味に於てパラウ語に挿入語分子 (Infix) といふものがあるかどうかは疑問で、語中に挿入せられたやうに見えるのは或は之を構成する語分子の一に接頭又は接尾せられたものであるかも知れぬが、異常の音便變化を受けた熟合語を分拆して原語分子に還元することが多くの場合不可能である以上、添加せられた語音は之を挿入分子と見るの外はない。之に屬するものは左記三語分子である。

マ。 上記接頭語分子マ(メ)と同じく「作爲」の意から轉じて動詞の活用を表示するものであるが、往々中間に挿入せられることがある。例

ガオト 渡渉——ガマオト 渡渉する

ガト 賞——ガマト 褒める

ケルヅ 着陸——クメメルヅ(ケ・マルヅの轉呼) 着陸する

ケヅ 附近——クメメヅ(ケマヅの轉) 近付ける

ラ(動)。 過去を表示する語分子で、第一語音の次——又は接頭語分子を冠するものに在りては其後——に挿入せられ、其際類化又は音便による變化を生ずる。例

現在	過去	現在	過去
マ〔接頭〕 爲	ムラ	イゴン	イリゴン
メサン 見	ミルサン	スエベク 飛	シレベク
サル 甚	シラル	メネレベヅ 答	ムレネレベヅ
オレネス 聞	ウルレネス	オムガル 投藥	オムレガル

此語分子は獨立しては用ひられる事がないが、中央カロリン語の接尾語ラと同じく、原意は「去」であらうと思はれる。

ル(形)。 前記接尾語分子ルと同じく、國語のコト、モノに相當する語分子で、形容語から抽象名詞を作るにあたり、第一語音の次に挿入して用ひられる。例

ガデレゲレク 黒——ガルデレゲレク 黒いこと

ビブルルク 黄——ブリブルルク 黄いこと
クロウ 大——クルロウ 大いこと

最後の例はクルといふ接頭語分子を冠したものと見る事が出来る(第二五頁)。ビブルルク(黄)も亦ブルク(染料)といふ語から導かれ、ビはメ(形容語分子)の音便と思はれるから、正しくいへば此ルも上記接尾語分子に屬するものとせねばならぬ。

四、疊合

ガト(煙)からガテガト(霧)といふ語が生まれたやうに、一單語を重疊する事によつて若干縁故のある他の意義を表示するものを疊語と稱へるのであるが、パラウ語に於ては此例の如く一語全體を重疊することは寧ろ稀で、多くは語頭又は語尾の一、二、語音、又は若干語分子から成るものに在つては其一就中語幹を反復するのみである。

疊合の結果語義に若干の變化を來すことは勿論で、之を次の如く分類し得る。

(イ)反復又は重復表示。例

ガル 木——ガルレガル 樹木

ゴスミ 打——ゴセゴスミ 連打

ブソグ 毬毛——ブセブスゲル 毬立クバダツ

テルブ(原語ツブ) 唾せる——テレブツブ[複]

ロウス 分配——ロウロウス 分ちたる[複]

(ロ)指小。形容詞に在つては程度の低いことを示し、動詞に在つては其動作行爲の微々たることを表現する。例

ゲゲデブ 短——ゲゲゲデブ 稍短

メクニト 惡——メキクニト 稍惡

ビブルルク 黄——ベビブルルク 稍黄

メネリム 對話——メネルムルム 呾く

動詞は通例更にヂ(唯)を接頭し、且少なからぬ音便變化が行はれる。例

メラサグ(原語ラサグ) 切——ヂ・メ・レルセラサグ 少し切る

オメガル(原語ベガルル)^(帆舟) 帆走——ヂ・オム・ベベガル 少しく帆走する

第三章 語

形態上からいへばパラウ語は國語と同様に、大體に於て體言と活用言とに分れ、體言は數詞及代名詞がやゝ特種な形式を備へて居るのみで、嚴密なる差別はないのであるが、意義又は用法上からは之を西洋流の品辭に區別し得ることは勿論で、本篇に於ては名詞、形容詞、數詞、代名詞、動詞、副詞、助語、感動詞にわけて記述する。此順序は單に説明の便宜にもとづくものである。

一、名詞

冠詞。固有名詞及品物の名稱を除いては名詞と他の品辭との間に判然たる區別のないことは上記の通であるが、名詞又は准名詞として用ひられる語には多くはア音を冠する。此アは前章にも述べたやうに、名詞と接合して其一語分子の觀を呈することもあるが、其本質は寧ろ冠詞(助語)と見るべきものである。例

- ア ^(名)ネクレル ^(彼の)ア オット 彼の名はオット(なり)
- ア ^(舟)ムライ ア ^(大)クロウ 舟大(なり)
- ア ^(家)ブライ ア ^(了)テレマルル ^(破壊)家破壊せり

クロウは形容詞、テレマルルは動詞トメルリの一活用形であるが、パラウ語には國語のス又はナリにあたる助動詞は存在せず、連繫助語を用ひる事なくして二語を排列する場合には前續語は主語、後續語は述語と了解せられるから、クロウ、テレマルル共に准名詞として第一例のオット(人名)と同様に用ひられたのである。

形容詞又は數詞が名詞に先行する場合には冠詞アは之を隔て、劈頭に位置する。例

- ア ^(大)クロウ ^(の)ル ^(家)ブライ 大なる家
- ア ^(長)ゲゲマネト ^(の)ル ^(木)ゲルレガル 長い木
- ア ^(一)タル ^(の)ムライ 一つの舟

接頭語分子ゴを以て始まる語に在つてはアを冠することはない。——恐らくはゴが本來アと同性質の語分子であつたからであらう。 例

- ^(小刀)ゴレス ア ^(了)リライツ 小刀は紛失した
- ^(肖像)ゴゲシウム ア ^(甚)クスマル ^(良)ウニル 汝の肖像は甚よい

「人」を意味する原語ルに此アを冠したアルといふ語も亦生物の複數を表示する場合に限り、此冠詞に代用せられることがある(第三三頁参照)。例

- アル ^(人)ガツ ^(人)人々 アル ^(魚)ニゲル 魚類
- アル ^(人)ナラ ^(在)ナル・アの約) ^(舟)デアアル 舟に在る人々
- アル ^(人)ウア ^(如)ア・リク リクのやうな人

さりながら此語の本義は「人」であるから、次の如く單獨でも用ひられるのである。

數。 右の如く生物に在つては冠詞アの代りにアルを用ひて複數を表示することもあるが、名詞自體には單複による變化はなく、又之に添付せらるべき複數記號(國語のラ、ドモ、タチの如きもの)も存在せぬ。之に反して形容詞及動詞は複數に用ひられる特別形式を備へて居るから、之により或は文脈に照して單複を辨別することが可能であるのである。——形容詞及動詞の項下参照。

性。 國語及他の東洋諸語と同じく、語自體には性による區別はなく、自然性を表示する必要が

ある場合にはサガル(男)、ヂル(女)といふ語を添付する。例

ナルク ^(手)	エル ^(の)	サガル	男の子	ナルク ^(手)	エル ^(の)	ヂル	女の子
マルク ^(雞)	エル ^(の)	サガル	雄雞	マルク ^(雞)	エル ^(の)	ヂル	牝雞

格。語法上からは主格、屬格及目的格(與格も之に含まれる)の存在を認めねばならぬが、名詞自體は常に不變で、主格には原形を其儘用ひ、屬格及目的格を表示する爲には次の二方式の一が用ひられる。

(一) 代名詞を接尾する方式。後記の如く代名詞は二種の接尾形を有し、其一は屬格表示に用ひられる。例へばレン(心)といふ名詞は人稱によりレヌク(我心)、レヌム(汝の心)、レヌル(彼の心、其心)、レヌヅ(我汝の心)、レンمام(我々の心)、レンミウ(汝等の心)、レンリル(彼等の心)となるのである(第〇〇頁参照)。

他の一種は動詞に接尾して目的格を表示するもので、各人稱毎に時格によつて二形式を備へて居る。詳細の説明は後記の代名詞及動詞の項下に譲り(第〇〇頁及第〇〇頁)、こゝに其一様式(自今格)の一例を擧げる。

原形	ベス(與)	ルケズ(畫)
第一人稱〔單〕	メスガク	ルケサク
第二人稱〔單〕	メスガウ	ルケサウ
第三人稱〔單〕	メス(メサン)	ルケシ
自他稱	メスギヅ	ルケシヅ
第一人稱〔複〕	メセمام	ルケセمام
第二人稱〔單〕	メセミウ	ルケセミウ
第三人稱〔單〕	メセテリル	ルケセテリル

目的格が代名詞のみであるならば是だけで十分意を達するのであるが、其が他の名詞であるか、若くは其以外に補足語を擧げる必要がある場合には、動詞には第三人稱代名詞を接尾した形を用ひ、名詞は原形を以て之に後續する。例

ア ^(我) ク	トメリ ^{(破壊)之}	ア	ブライ ^(家)	私は家を破壊する		
ア ^(我) ク	ムサ ^(與)	(メス・アの約)	ゴレス ^(小刀)	ア	ブイク ^(少年)	私は少年に小刀を與へる

ア^(我)ク コレ^(等)ベ^(彼等)デテリル アル^(子供) ナルク 私は子供等を答つ

(二) 助語エル(ル)を用ひる方式。 エル(略してルといふ)は助語の項下に記述するやうに、其前後に位する兩語が或る關係に於て連繋せるべきことを表示する語分子であるから、屬格を示すにも目的格(與格)——時としては方位格、方便格、奪格等——を標識するにも用ひられる。例

ア^(舟) ムライ エル^(の) カウ 汝の舟
ア^(我)ク デル^(了) ル^(に) ニ 私^(彼)は彼にいらた
ア^(我)ク ウレ^(了)メス エル^(を) ニ 私^(彼)は彼を見た
ン^(彼) ウレ^(了)ゲル ル^(を) ア ネク^(名)レク 彼は私の名を問うた
デ^(不)ア^(我)ク ケ^(汝) ボ^(行)ル ア ベル^(村) 汝は村に行かぬか
ケ^(汝) メ^(何する)グラ エル^(て) チ^(此)アン 汝は此處で何するか

(一)(二) 兩様式の用法上の區別は之を明にせぬが、六十七年前獨人ドクトル・セムペルがペレリウ島の東岸アルデロルレクの酋長を訪問した時、隨行の圖工馬尼刺人ゴンザレスといふもの、酋長の間に應じて、ナク^(我)ア マルクス^(描) エル^(を) カウ(私は汝を描寫して居る)と答へた所が、酋長はナク^(我)ア

マケ^(描)サウ(ルケサウの誤記か)といはねばならぬと教へた。然るにゴンザレスが又しても マルクス エル カウというたので、酋長は憤つて坐を立つたとセムペルが記述して居る所を見ると、長上に向つては接尾形代名詞を用ひることを例とするのであらう。

慣用語法。 獸畜の所有關係を表示する爲には、チャモロ語と同じく(四三頁)、必ずガラム(動物、家畜)といふ語をそへ、之に代名詞を接尾し、エル(ル)を以て其動物の名稱に連繋する。例

ゲル^(家畜)メク エル^(の) ビリス 我が蓄犬
ゲル^(家畜)メム エル^(の) マルク 汝の蓄鶏
ゲル^(家畜)メツ エル^(の) バビ 我々の蓄豚

普通名詞の外に、形容詞及動詞から名詞が導かれることもあり、或は准名詞として用ひられることもあるが、各其項下に記述する。

二、形 容 詞

用法。 パラウ語の形容詞は純然たる體言で、活用せられることはなく、之を述語として用ひる

場合にも上記の如く、何等の變化なく、何等の補助を用ひずして單に排列せられるのみである(第四四頁)。尙左に二、三例を擧げる。

ア ベル^(村) ア ゲゲレイ^(小) 村小(なり)

ゴレス^(小刀) ア ケドールム^(鏡) 小刀(は)銳(し)

ア ナルク^(子) ア ペゲリラネル^(泣易) 小兒(は)泣き易い

但し主格が人代名詞である場合には形容詞は動詞に準じて用ひられ、アを冠することはない。——
代名詞及動詞の項下参照。

アトリビユチツ^{アトリビユチツ} 附庸的に用ひられる場合には名詞に後續又は先行し、助語エルを以て連繫せられる。例

ア ナルク^(子) エル^(の) ペゲリラネル^(泣易) 泣虫の子供

ア テルラマス^(人名) エル^(の) ミゴ^(首) 盲のテルラマス

ア ゲゲレイ^(小) エル^(の) ベル^(村) 小い村

ア ケドールム^(鏡) エル^(の) コレス^(小刀) 鋭い小刀

此場合形容詞が先行することはカロリン及マーシャルには絶無であるが、國語及チャモロ語と趣を

同するもので、時としては名詞にも冠詞アを添へることがある。例

ア メンシエク^(堅牢) エル^(の) ア ブライ^(巻) 堅牢なる家

ア クロウル^(大) ル ア ガヅ^(人) 大なる人

後の例のル・アは約せられてラとなることもある。

アル(人)といふ語の修飾には常に形容詞が後續し、且助記エルは省略せられる。例

アル^(人) メテート^(富) 富人

アル^(人) メアウ^(無位) 平民

階級。形容詞には上級、最上級及低級を表示する語法がある。之が爲には他の單語又は語分子が添へて用ひられる。

(イ)上級を表示するにはベイといふ語分子を冠し、或はゴイサブ又はゴイガといふ語をエル(ル)を以て連繫して用ひる。例

ベイ^(多) ウニル^(良) 更に良き

ゴイサブ^(大) エル^(の) クロウ^(大) 一層大

ゴイガ^(の) ル^(の) ゲゲレイ^(小) 一層小

ペイは「多」の意のベトク又はビバクと語原を同うするものと思はれるが、ゴイガ及ゴイサブの原義は尙之を明にし得ぬ。形の上から言へば形容詞に屬するもので、「一段すぐれた」といふ意を有するのであらう。

二者の状態を對比するには國語と同じくヨリの意を含む助語を介することを以て足れりとする。此助語には既記のエルが用ひられる(第四八頁参照)。例

セル^(其) ブライ^(家) ア クロウ^(大) エル^(より) チア^(此) ル^(の) ブライ^(家) 其家は此家より大い

(ロ)最上級を示すには第三人稱代名詞ル(第七一頁参照)を接尾する。之によつて形容詞は屬格となるのであるが、此形が最上級と了解せられる心理を詳にせぬ。——モノ又はコトの意の語分子ル(第三七頁及第一一五頁参照)とは關係がないやうである。例

キチ^(高)ヂウ^(の)ル^(の)(原形キチダイ) ア ロイス^(山) 最高山

ガ^(黒)デレゲケル^(の) ア マメヅ^(布) 最も黒い布

ゲ^(肥大)デレブニル^(の) アル ガヅ^(人) 最も肥大な人

メ^(瘠)センゲ^(の)ヂル^(の)(原形メサナゲヅ) ア バビ^(取) 最も瘠せた豚

ゲ^(小)デリニル^(の) ア ムライ^(舟) 最も小さい舟

右の外ク^(甚)マル(甚)、ナルゲイ(第一、初頭)、ヂタ^{(唯(一))}(ヂタン、ヂニルタン)、ヂ^(不)ア^(能)ク^(其)ア^(能)セ^(其)ベ^(其)ゲ^(其)ル

(之に加ふるものなし)を冠して最上級を表示することもある。例

ク^(甚)マル^(良) ウニル^(良) 甚良し

ヂ^{(唯(一))}タ^(の) ル^(の) メクニト^(悪) 最悪

ナル^(二)ゲイ^(大) クロウ^(大) 一等大

ヂ^(不)ア^(能)ク^(其)ア^(能)セ^(其)ベ^(其)ゲ^(其)ル^(の) ウニル^(良) 之に超す良いものはない

(ハ)低級を表示する爲には既記の如く主要語分子を重疊する(第四一頁)。例

ゲ^(不)デ^(不)フ^(不) 短——ゲ^(不)ゲ^(不)デ^(不)フ^(不) 稍短

キ^(不)ヂ^(不)ダイ^(不) 高——ケ^(不)キ^(不)ヂ^(不)ダイ^(不) 稍高

メ^(不)・ク^(不)ニト^(不) 悪——メ^(不)・ク^(不)ニト^(不) 稍悪

ク^(不)ロウ^(不) 大——キ^(不)ク^(不)ロウ^(不) 稍大

メ・レマウ 青——メ・レレマウ 帶青
 ビブルルク 黄——ベビブルク 帶黄
 ガ・デルゲレク 黒——ガ・デデルゲレク 帶黒

複數。 既記の如く名詞の複數は之と、連用せられる形容詞によつて表示せられることがある(第四五頁)。之が爲には形容詞にメ(多)の語幹への轉音)を接頭し、メ又は母韻を以て始まる形容詞に在つてはヂを冠して表示する(第二八頁)。例

ア^(大)メ・クロウ^(の) ル プライ^(家) 大なる家々
 ア プライ^(家) ア^(大)メ・クロウ 家々大なり
 チ^(良)・ニウル^(の) ル ゲレルガル^(木) 良き樹木
 アル マルク^(鳥) ア チ^(瘡)・メセナゲツ 此鶏等は瘡なり
 アムライ^(舟) チ^(小)・メ・ゲレイ^(總) ロクイ 舟は總て小

名詞形。 形容詞から其意味の名詞を作るには語頭語音をクル(クレ、クロ)にかへ、若くは第一語音の次にル音を挿入する。此ルが「物」又は「事」を意味する語分子で、クル(クレ、クロ)も亦複合

接頭語分子なることは既に前章に述べた通りである(第三九及二五頁参照)。例

クロウ 大い クルロウ 巨大
 ゲレイ 小い グレレイ 微小
 ケテレブ 太い グルテレブ 肥大
 ケテピオプ 禿の クルテピオプ 禿頭
 キヂダイ 高い クルチダイ 高大
 ビルブルク 黄い プリブルルク 黄
 ガデレゲレク 黒い ガルデレゲレク 黒

左記は不規則變化と見るべきものである。

ウニル 良い クルニアオル 善良
 メクニト(原語ニト) 悪い クルニト 惡
 メセナゲツ 瘡たる クレナゲツ 瘦瘡

此等の諸形は純然たる名詞であるから、之にも代名詞を接尾して屬格を作り得ることは勿論であ

る。例

一人稱〔單〕	クルロウ(巨大)		
	クルルネク ^(我)	〔複〕	クルルネム ^(我々の)
二人稱〔單〕	クルルネム ^(汝)	〔複〕	クルルニウ ^(汝等の)
三人稱〔單〕	クルルネル ^(彼)	〔複〕	クルルイル ^(彼等の)
自他稱	クルルネツ ^(我汝の)		

三、數 詞

基本數。パラウ語の基本數は他のミクロネシア諸語に比すれば遙にマレー・ポリネシア語に近似して居る。但し單獨に呼稱する爲にはオ(冠詞アの轉呼であらう)又はイを接頭し、或はンを接尾することがあるので、左記の如き形に轉化した。——括弧内に記したのは原形と認められるものである。

呼 稱

マレー・ポリネシア標準形

參

考

一 タン(タ)

サ

マオリ語ではタヒ

二 オルン(ル)

ルア

三 オ・デイ(デイ)

テル

四 オ・アン(ア)

パト

カロリン、フィジー及マオリ語 ファ

五 オ・イム(イム)

リマ

六 マロン(レム)

エネム

七 ウイツ

ピツ

八 イアイ(アイ)

ウアル

九 イチウ(チウ)

シワ

カロリン語 チウ

十 マゴツ

ブルー

リオグといふ形も存したものとやうである

此形は十を以て限りとし、國語のヒ、フ、ミ、ヨ等と同様に抽象的に數をよむ場合にのみ用ひられ、十以上は再びタンから繰返すのである。

常數。一般的數稱としては次の形が用ひられる。此は國語のヒトツ、フタツ、ミツ等と性質を

同うするもので、語頭のア、ゲ、ゴは我がツに相當する接頭語分子である。

- 一 アタン
- 二 ゲルン
- 三 ゲデイ
- 四 ゲオアン
- 五 ゲイム
- 六 ゲロレム
- 七 ゲウイヅ
- 八 ゲアイ
- 九 ゲチウ
- 十 トリオグ (タ・リオグの約)
- 十五 トリオグ マゲイム (爾餘の二位數も之に準ずる)
- 二十 ルリオグ
- 三十 ポゲデイ
- 四十 ゴゴアン
- 五十 ゴゴイム
- 六十 ゴゴレム
- 七十 ゴゴイヅ
- 八十 ゴガイ
- 九十 ゴゲチウ
- 百 タル
- 二百 ゲル
- タルト
- タルト

ゴゲ(ゴガ、ゴゴ)は恐らくはゴの疊語で、上記ゲと同語から出たものであらう。

- 千 タル
- テラエル
- 二千 ゲル
- タル
- テラエル

此形は體言で、ア、ゲ(ゴ)は冠詞、ン、イ(エイ)は接尾語分子であるから、限定語として附庸的に用ひられる場合には被限定語に先行し、ル(エル)を以て連繫せられ、語尾のン、イは除去せられる。

例

- ア・タル (籠) スク (魚) エル (手) タロ芋の一籠
- ゲア (魚) ル (魚) ニゲル 八つの魚
- ゲイム (魚) エル (魚) シルス 五日

述語としては多くは代名詞ン(其)を主格として用ひ、語頭のアを去り、ゲ(ゴ)はエ(オ)と轉呼せられる。例

- ン エルン (其は二(なり))
- ン エイム (其は五(なり))
- レキク (年(我)) (其) オゴアン (私)の年(其)は四十(である)

特別數稱。右の常數の外、或る種の事物に對しては特別の數稱が用ひられる。

(イ) 人數をいふ場合には基本數(十一以上は常數)にテを冠する。例

- テ^(八)ル^(九) カ^(八)ツ 二人の人
- テ^(彼等) デ^(人) イ^(三) 彼等は三人(なり)
- テ^(人) オ^(四) アン 彼等は四人(なり)
- テ^(人) ト^(三十) デ^(三十) イ^(三十) (テ・オゲ^(三十) デ^(三十) イ^(三十) の約) 彼等は三十人(なり)
- テ^(人) ト^(四十) ゴ^(四十) アン^(四十) (テ・オゴ^(四十) アン^(四十) の約) 彼等は四十人(なり)

此接頭語分子は三人稱複數のテ(彼等)の轉用であるから、一人を意味する場合にはテ・タンとはいはず、^(唯)ヂ・タンといふ語を用ひる。

(ロ)長形のもの(木材、植物、槍、鉛筆等)を數へるには一乃至六に在つては常數にウオンといふ語分子(國語の「本」に相當する)を接尾し、七以上は常數を用ひる。即ち

- 一本 テルオン(タウオンの音便) 二本 ゲルオン
- 三本 ゲ^(三) デ^(三) イ^(三) ウ^(三) オン 四本 ゲ^(四) オ^(四) アイ^(四) ウ^(四) オン
- 五本 ゲ^(五) イ^(五) ム^(五) オン 六本 ゲ^(六) ロ^(六) レ^(六) ム^(六) オン

ウオンは恐らくはウアト(柱)と同源から出たのであらう。助語エル^(の)(ル)を介して他語に連接する場

合には語尾のンは消滅する。

(ハ)匾平、薄質のもの(葉、紙、板等)にありては、一乃至六に限り常數にエゲトン(原語不明)といふ語分子を接着して表示する。即ち

- 一枚 テ^(一) ゲ^(一) ト^(一)ン 二枚 ゲ^(二) レ^(二) ゲ^(二) ト^(二)ン
- 三枚 ゲ^(三) デ^(三) イ^(三) エ^(三) ゲ^(三) ト^(三)ン 四枚 ゲ^(四) オ^(四) アイ^(四) エ^(四) ト^(四)ン
- 五枚 ゲ^(五) イ^(五) ム^(五) ゲ^(五) ト^(五)ン 六枚 ゲ^(六) ロ^(六) レ^(六) ム^(六) ゲ^(六) ト^(六)ン

七以上は常數を用ひる。

(ニ)團塊状のもの(球、硬貨、果實、獸、家屋、箱等)を數へるには次の如き數詞を用ひる。

- 一 ゲ^(一) イ^(一) モ^(一)ン 二 テ^(二) ブ^(二) ロ^(二)ン
- 三 ク^(三) ル^(三) ・デ^(三) イ 四 ク^(四) レ^(四) ・オ^(四) アン
- 五 ク^(五) レ^(五) ・イ^(五) ム 六 ク^(六) ル^(六) ・ロ^(六) レ^(六) ム
- 七 ク^(七) レ^(七) ・ウ^(七) イ^(七) ツ 八 ク^(八) レ^(八) ・ア^(八) イ
- 九 ク^(九) ル^(九) ・チ^(九) ウ 一〇 タ^(十) ゲ^(十) ル

ゴネイム^(第五) ル^(第六) ガヅ^(第七) 第五番の人

ン^(其) オネリオグ^(第七) マ^(第八) ゲイム^(第九) エル^(第十) カベセニル^(第十一) ア^(第十二) フ^(第十三) プラル^(第十四) 二月十五夜(日)

副詞として「第一に」「第二に」の意に用ひる場合には多くはセル^(其)を冠して表示せられる。——此場合語頭語音^コは音便によりオとなる——例

セル^(其) ナルガイ^(第十) 最初

セル^(其) オネルン^(第十一) 第二に

セル^(其) オネデイ^(第十二) 第三に

倍數及分數。「倍」を意味する語(又は語分子)は存在せず、倍數を表示する爲には乘數に相當する常數を助語エルを介して被乘數に冠する。例

ゲロレム^(六) エル^(七) エイム^(八) ン^(其) オゲデイ^(第九) 五の六倍は三十(なり)

分割せられた物品の片數をいふにはビタン(半片)、チウヅ(縦斷片)又はドボグ(横斷片)を用ひ、之に常數を接頭する。例

數 半 片

縦斷片

横斷片

一 ビタン

テチウヅ^(一)

テドボグ^(二)

二 ゲルビタン

ゲレチウヅ^(三)

ゲレドボグ^(四)

三 ゲデイビタン

ゲデイチウヅ^(五)

ゲデイドボグ^(六)

分數も亦右の三語を用ひて次の如く表現せられる。例

二分の一 ビタン

三分の一^(第三) ゴネデル^(第七) チウヅ(又はドボグ)

四分の一^(第四) ゴネオアル^(第八) チウヅ(又はドボグ)

五分の一^(第五) ゴネイム^(第九) エル^(第十) チウヅ(又はドボグ)

三分の二^(二) ゲレチウヅ(ドボグ)^(三) エル^(四) ゲテ^(五) ル^(六) チウヅ(ドボグ)

四分の三^(三) ゲデイチウヅ(ドボグ)^(四) エル^(五) ゲオアル^(六) ル^(七) チウヅ(ドボグ)

配當。國語のヅツ(宛)に當る語分子はデル^(餘)又はデルセ^(余少)で、常數若くは特別數稱に接頭して用ひる。例

常 數

本 數

枚 數

個 數

語——數詞

- 一 デルタン
デルセタン
- 二 デルセルン
デルセルオン
デルセレイグトン
デルテブロン
- 三 デルセデイ
デルセデイウオン
デルセクイルデイ
- 十 デルセトリオグ
デルセタゲル
デルセタゲル
- 二十 デルセルリオグ
- 四十 デルスゴアン
- 百 デルダルト

之に「所有」の意の接頭語分子オウ(第二四頁)を冠することによつて「各其數ツツ取る」といふ意の動詞が作られる。例

- オウデルタゲル 各十個宛取る
- アク^(我) オウデルダルト 我百個宛取る
- ク^(汝) オウデルセデイウオン 汝は三本宛取る

ニ^(彼) オル^(取)デルセレグトン 彼は二枚宛取つた

不定數。 約二十、三十程、四十位などいふ約、程、位に相當するパラウ語はゴウ又はゴウネで、接頭語として用ひられる。例

- 約二十 ゴウネ・ルリオグ 三十程 ゴウ・ウゲデイ
 - 四十位 ゴウウゴアン 百位 ゴウネ・ダルト
 - 二百程 ゴウネ・ルル^(二の) ダルト^(百) 約五百 ゴウネ・イム^(五) エル^(の) ダルト^(百)
- 此ゴウ(ゴウネ)も亦ン又はルの後に來る場合には子音を失うてア行の音となる。例
- ン^(其) オウ・ウゴアン 其は四十位
 - ン オウネ・ダル^(で) エル^(五) ガイム 五で約百
- 十餘、二十餘等の「餘」は^(余)デル^(其)ネルといふ語を以て表示せられる。例
- トリオグ^(十) マ^(及) デル^(余)ネル^(其) 十と其餘

右の外不定數詞と見るべきものは左の諸語である。

- 多 ベトク、ビバク、オブドイス

少 ケサイ
 少許 セセイ、テルギブ
 一、二 ベビル
 總、全 ログイ、ロギル

數量。容積と重量についてはパラウ人は精確な標準を有して居らぬ。之に反して長さに関し
 て身體四肢を單位とする種々の尺度がある。左に之を列擧する。

レオネル 尋——^(一)テルレオ、^(二)ゲレレオ、^(三)ゲデイレオ ^(四)ゲオアイレオ、^(五)ゲイムレオ ^(六)ゲロレム
 エル ^(七)レオアル 以下準之

アルダルル 小尋(兩手を緩かに伸べた長さ)

ドガダゲム 半尋

ツグウリクル 臂頭から中指までの長さ

ツグウレメル 曲げた臂の内角から他の手の中指の先まで

テルゲバス ^(一)腋の下から他の手の中指の先まで

ムテルラビタン ^(半) 耳朶(テラウは耳飾)から對側の手の中指まで

ビタレギイム ^(腕) 腕の長さ

テルメデウ ^(二) 前腕の長さ

テルベロベル ^(二) 手の長さ

テリウトグ ^(二) 拇指と中指とを擴げた長さ

テリウトコレテム ^(二) 拇指と人指指とを擴げた長さ

テレギイムゴムク ^(二) 手の幅

テレギヅ ^(二) 指幅——^(一)ゲレギヅ、^(三)ゲデイギヅ、^(四)ゲオアイギヅ

テルボコス ^(二) 拇指幅

テルエアゲル ^(二) 一足の長さ——^(一)ゲルエアゲル、^(三)ゲデイウエアゲル等

テトバルツ 足の長さ^(一)に他の足の幅を加へた寸法

テルバケス 一步の長さ——^(一)ゲレバケス、^(三)ゲデイバケス等

四、代名詞

代名詞として特種の形態を備へて居るものは人稱代名詞のみで、指定語、疑問語等は形式、用法上からいへば寧ろ形容詞の範疇に屬すべきものであるが、便宜上之を一括し、人稱代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、不定代名詞に分つて記述する。

(一) 人稱代名詞

人、事、物を意味する名詞の代りに用ひられる特種の語彙を假に人稱代名詞と稱へる。インドネシア語系の通則として此代名詞は第一、第二、第三人稱單複數の外に、自他稱即ち對手と自分とを併稱する格——西洋人によつて含他^{インクリユシュー}的^{エクスクリユシュー}の第一人稱複數と呼ばれるもの——がある。本書に於ては常に第三人稱單數と第一人稱複數(所謂排他^{エクスクリユシュー}的^{インクリユシュー}の第一人稱複數)との中間に之を序する。

原形及諸變形。パラウ語の人稱代名詞は後記の如く多くの形式を備へて居るけれども、其語尾の語音は少數の例外を除き、ク(第一人稱)、ウ又はム(第二人稱)、イン又はル(第三人稱)、ヅ(自

他稱)に限られて居る。——但し音便によつてルはレ、ヅはデとなることがある。——此は同一人稱の諸形が、單複を通じて本來同一の原語から分化した結果で、其語頭が區々であるのは、語構成の原則に従ひ、或る語分子が接頭せられた爲とせねばならぬ。第二人稱のウとム、第三人稱のンとルとは相通音であるから、原語はク、ウ(ム)、イ、ル(ン)、ヅ若くは之に近い語音から成立するものと推定せられる。三人稱の二形中イは國語のコ(此)に、ル(ン)はソ(其)又はカ(彼)に當るものゝやうである。大同少異はあるが、ミクロネシア、馬來、ビスマーク群島、フィジー及ポリネシア諸島語にも此語幹が認められ、就中ニウ・アイランド(ノイ・メクレムブルグ)語の代名詞が殆ど之を一致して居ることは注意すべきである。恐らくはインドネシアに共通の語幹であつたのであらう。パラウ語に在りては上記語幹から左の諸形が分派せられた。

人稱	獨立形	連用形		接尾形	
		尋常	假設	所有格	目的格(一)
第一人稱	單 ナク	アク	アク	ク	ク
第二人稱	單 カウ	ケ	ゴム	ケム	ム
				ウ	ク
					オク(ゴク)
					オン(コン)

語——代名詞

第三人稱	單	ニ	ン	アル(アレ)	エル(エレ)	ル	イ、ル(ン)	アン(ネ)
自他稱		キヅ	ケデ	アヅ(アデ)	ケヅ(ケデ)	ヅ	ヅ	オヅ(コヅ)
第一人稱	複	ケマム	キ	アキム	キム	ム(マム)	マム	
第二人稱	複	ケミウ	コ	コム	コム	イウ(ミウ)	ミウ	エメイ (ケメイ)
第三人稱	複	チル	テ	アル(アレ)	エル	イル(イレ)	テリル(人)	テレ(人) アン(物)

右の表に於て見るが如く、第一乃至第三人稱複数は之に相當する單數から導かれたもので、之と上記四原語とを基として種々の形が構成せられたのである。以下順を追うて記述する。

獨立形。

原形に補音ng又はkを冠して獨立を表示したもので(第一七頁參照)、第三人稱複數のチルはタガログ及ビザヤ語のシラと同源であらう。カウ、キヅ(キタ)はインドネシア語に共通である。時としては強意の爲め之にイを冠してイナク、イカウ、イニ等とすることもある。此イは上記の如く本來「此」の意の指定語であるから、「此我」「此汝」「其彼」等の意となるのである。

單獨で人稱表示に用ひられることの外に、此形は他語とも連用せられることがあるが、必ずエル(ル)を介することを要する。エル(ル)は既記の如く、主語對述語の場合を除き、あらゆる相對關係

を表示するものである(第四八頁參照)。例

- マセス ^(稱す) エル ^(の) カウ ^(汝) 汝のマッチ
- アク ^(我) デル ^(云) ル ^(に) ニ ^(彼) 私は彼にいうた
- アク ^(我) ウメス ^(見) エル ^(を) チル ^(彼等) 私は彼等を見る
- ン ^(彼) オイガ ^(多) (ゴイガ) ^(の) クロウ ^(大) エル ^(より) キヅ ^(我汝) 彼はお互より一層大い

此例のやうに直接述語に連る主格には常にアク、ンの如き後記の連用形が用ひられるのであるが、疑問文に於ては時としては主格の上に更に獨立形を冠することがある。例

- カウ ^(汝) ケ ^(在) ナルゲル? ^(何處) 汝は何處に居るか

連用形。

述語と連用せられる形式で、上表に於て見る如く、叙法によつて三種に分たれる。

(一) 尋常語法。 大體に於て獨立形の轉呼又は短縮せられたものと見ることが出来る。此形は主格以外には用ひられることなく、之と連用せられる述語は形容詞に在つては原形(アを冠せぬ)、動詞に在つては常に終止形(其項下參照)である。例

- アク ^(我) メキウ ^(眠) アイウ 我眠る

ケ^(汝) ムレギウアイウ^(了) 汝は眠つた
 ン^(其) メリネル^(痛) ア ウネレク^(我) 私の齒が痛い
 ケ、ケデ、テのエ韻は後續語が母韻を以て始まる場合にはウ短韻に轉ずる。例

ク^(汝) オベス^(忘) 汝忘る
 ケヅ^(我) オレネス^(汝) 我等聞く
 ツ^(彼等) オメス^(見) 彼等は見る

(二) 假設法。 後記の接尾形(所有格)にアを接頭したもので、——第二人称單複數のゴムも恐らくはアムの轉オムの音便であらう——アは「若」の意の原語であるから(第二三頁參照)、正しくいへば此形は其屬格を表示するものであるが、國語に於て「我(若)行かば」を「我が(若)行かば」ともいひ得るやうに、パラウ語法に於ても「我が若」の意を以て主語に充當せられるのである。此場合他動詞の終止形が述語として用ひるに適せざるは當然で、國語の未然形に匹敵する一形が之に用ひられる。

——原則としては原形である(動詞「打消」の項下參照)。例
 アク^(若) メギウアイウ^(自) 若し我眠らば



ゴム^(若) ムレギウアイウ^(自) 若し汝眠りたらば
 アル^(若) オニタクル^(眼)(終止形メニタクル) 若し彼唄はば
 アデ^(若) ベチク^(發見)(終止形メチク) 若しお互が發見せば
 アキム^(若) オレネス^(我々) 若し我々が聞かば

(三) 否定法。 打消文に在つてはデアク(不)、打消の假定句に在つてはアラク(ア・デアクの約轉であらう)といふ語が句頭に位し、代名詞は之に續くのであるから、假設法の場合と同じく、接尾形所有格を以て表現せらるべき筈であるが、デアク及アラクに直接結合することが許されぬ理由が存したらしく、之にカ行の語音又はエ音を接頭した特別の形が發生したのである。此場合他動詞の終止形が述語として用ひるに適せず、國語の未然形に相當する活用形が之に代ることも亦上記假設法と同様である。例

デアク^(不) エル^(彼) オニタクル^(眼)(終止形メニタクル) 彼が唄はぬ(彼唄はず)
 アラク^(若) ク^(我) ウニタクル^(眼) 若し我が唄はずば
 デアク^(不) ケム^(汝) オメス^(見) 汝が見ぬ(汝見ず)

(若) アラク (我女) ケツ (見) オメス 若し汝が見ずば

疑問代名詞等が句頭に位する場合にも同じ理由にて主格には此形を用ひる(第一四二頁参照)。
接尾形。 代名詞が所有格を表示するか、目的格(補足格を含む)なるかによつて形式を異にし、
後者は更に二形を備へて居る。

(二) 所有格。 西洋語の所有代名詞に相當するものであるが、被支配語の性、數、格による變化は
なく、人稱代名詞と區別して記述する必要を認めぬからこゝに列擧する。

代名詞を以て所有者を表示するには上記の如く、助語エル(ル)を介して、獨立形を以てすること
も可能であるが、此方式は外來語なるマセス(燐寸)、クロク(時計)等、代名詞を接尾することが不
可能ではないとしても耳馴れぬものか、若くは特に所有者を強く表明する場合にのみ用られ、通例
は接尾形によつて示される。

此形は最も上記原形に近いものであるが、接合の際前續母韻に音便變化が起り、時としてはア行、
ガ行又はナ行の語音が挿入せられることがある。其變化は極めて區々で、通則を求めることは困難
であるが、左に二、三の標準を例示する。

(イ)ア韻に轉ずるもの。例ガヅ(人)

- | | | |
|---------|-----|---------|
| 第一人稱〔單〕 | ガダク | 〔複〕ガデマム |
| 第二人稱〔單〕 | ガダム | 〔複〕ガデミウ |
| 第三人稱〔單〕 | ガダル | 〔複〕ガデリル |
| 自他稱 | ガダヅ | |

例 ベル(村)

- | | | |
|---------|------|---------|
| 第一人稱〔單〕 | ベルアク | 〔複〕ベルマム |
| 第二人稱〔單〕 | ベルアム | 〔複〕ベルミウ |
| 第三人稱〔單〕 | ベルアル | 〔複〕ベルリル |
| 自他稱 | ベルアヅ | |

右の外ツブ(睡)ツバク、ツベバム、^(我)デン(我)ヂナク、^(母)マヅ(母)マダク、^(舌)グル(舌)グラク、^(彼等)グルリル、^(我)ギイム
(我)ギイマク、^(我々)ギイモマム、^(汝等)ギイモミウ、^(彼等)ギイモイル、^(母)ガヂル(母)ダラク、^(我)ダレマム、^(我々)デリル、^(肝臟)ガヅ(ガ
ダナク)、^(蕉實)ツ(蕉實)ツアク等は此例に屬する。

(ロ)前續母韻がイに轉ずるもの。例ウアグ(脚)

第一人稱〔單〕 ウギク 〔複〕ウゲマム

第二人稱〔單〕 ウギム 〔複〕ウゲミウ

第三人稱〔單〕 ウギル 〔複〕ウゲリル

自他稱 ウギヅ

右の外ブライ(家)、ブリク(我)、ムライ(舟)、ムリク(我)、シバイ(召使)、シビク(我)、テグイ(後任者)、テギク(我)、クガウ(芽)、クガイク(我)、ダク(指輪)、カフ(指輪)、ケブケビク(我)、プト(尻)、プチク(我)、テト(手提袋)、テトク(我)、テトマム(我々)、テトミウ(汝等)、テテリル(我等)等も此例に屬する。

(ハ)前續母韻ウとなるもの。例レン(心)

第一人稱〔單〕 レヌク 〔複〕レンマム

第二人稱〔單〕 レヌム 〔複〕レンミウ

第三人稱〔單〕 レヌル 〔複〕レンリル

自他稱 レヌヅ

此外^(木籠)ブク(ブチク)、^(我)デレ^(斧)ベル(デレブレク)、^(頭)ベヅル(ブデルク)、^(石)バツ(ベヅク)、^(體)キウアル(キウルク)、^(我)グイ(グイウク)、^(釜)ペグチ(ペギウク)、^(耳朶)テラウ(ツルク)、^(神體)ガリヅ(ゲヅク)、^(乳房)ツト(ツム)、^(上)バブ(ベブク)、^(我)ベブクム、^(汝)ベブクル等も之に屬する。

(ニ)前續母韻をエに轉化するもの。例バイル(衣)

第一人稱〔單〕 ビレク 〔複〕ピラム

第二人稱〔單〕 ビレム 〔複〕ピリウ

第三人稱〔單〕 ビレル 〔複〕ピリル

自他稱 ビエヅ

此外^(此)デイル(デレク)、^(我)マルク(メルケク)、^(我)ガルム(ガルメク)、^(我)プテク(プテケク)、^(椰子)リウス(リセク)、^(筆)ゴルケス(ゴルケセク)、^(我)ゲバクル(ゲペクレク)、^(子)ナルク(ネケレク)、^(傍)ピタン(ピテロナク)、^(物)クラロ(クロロクレク)、^(我)ゴレス(ゴレセネク)、^(下)ゲオウ(ゲウネク)等も亦此例に入るべきものであらう。

右の例中に見えるバブク(我上)、グウネク(我下)、ピテロナク(我傍)等は副詞的にも前置詞的にも

用ひられ、又サウ(愛、好)、ギト(厭、惡)、セベク(能)等は元來體言であるが、此接尾代名詞を添付する事によつて「欲」「不欲」「能」の意の動詞に代用せられる。——後記動詞の項下第一四四頁参照。

(二) 目的格。 代名詞の目的格又は補足格を表示する爲には、獨立形にエル(ル)を冠して用ひることは既記の通であるが、其外に他動詞に代名詞を接尾する事によつても表示せられる。之に用ひる代名詞は上表に掲げたやうに二様式を備へ、動詞の形も亦尋常の終止形とは相違する(次項参照)。例へばオメス^(我) エル^(を) ナク^(我)(我を見る)等の意は次のやうにも表現せられる。

	第一様式	第二様式
第一人稱〔單〕	メサク	メソク
第二人稱〔單〕	メサウ	メソウ
第三人稱〔單〕	メサン	メソン
自他稱	メサヅ	メソヅ
第一人稱〔複〕	メスマム	メセメイ
第二人稱〔複〕	メスミウ	

第三人稱〔複〕 メステリル メステレ

各人稱に於ける兩様式は「時」の表現を異にするもので、現利那を境として上段のものは其以後を示し、下段のものは其以前を表現する。——之を自今格及至今格と稱へることは動詞の項下に述べる通りである。——第二接尾形が第一接尾形から導かれたものであることは想像に難くはないが、尙其構成を明にし得ぬ。

第三人稱單數第一接尾形は更にイトル(ン)との二種に分たれるから、メサンの如きン(又はル)を以て終る形の外に、語尾をイ韻に變ずるものがある。例

アク^(我) ゴレベチ^(善) 私は彼を答うつ
 アク^(我) リレネン^(了) 我之を聞いた

此形は目的格が代名詞以外の人又は事物である場合には、之と重複して アク^(我) ゴレベチ^(善) アナル^(手)の如く用ひられる。複數に在つても同様の理であるが、自今格に於ては事物に對しては之を接尾せず、至今格に在つては人に對してはテレ、物に對してはアンを用ひて區別する。——動詞の項下参照。

(二) 指示代名詞

嚴密にいへばパラウ語には指示代名詞と稱すべき特別の語彙は存在せず、すべて上記人稱代名詞に包含せられるのであるが、其外に第三人稱代名詞ニ〔單〕、チル〔複〕並に語幹チ〔單〕、アイ〔複〕——マオリ語の冠詞テ及ナに相當する——に語分子アン(音便ガン)、ラガン、エイ(音便ゲイ)を接尾した語がある。形態及用法上からは寧ろ形容詞に近いものであるが、便宜の爲め指示代名詞としてここに掲げる。

ニ、チルは人を指示し、チ、アイの形は事物に對して用ひられ、いづれも語尾の三形によつて指示の限界が定められる。即ちアン(ガン)は話者に近いもの又は關係のあるものを表示し、ラガン(ラ・アンの轉呼か)は相手に近いか、若くは之に關係のあるものに用ひ、エイ(ゲイ)は話者にも相手にも無關係で、一般的の指示を意味するのである。さればアン(ガン)とラガンとは國語のコ(此)とソ(其)との如く對立するのであるが、エイ(ゲイ)は其以外に立ち、時としては國語のカ(ア)のやうにソ(其)よりも遠いものゝ指示とも了解せられる。此觀念はミクロネシア—ポリネシア諸島民に共通

で、可なり明瞭に意識せられ、後述の運動方向を表示する語——^(來)メイ、^(往)ゲゴン、^(行)モン——にも現はれて居る(第二四頁参照)。漢語、西洋語には此區別はなく、國語に於てもソとカ(ア)との差異は頗る曖昧であるので、適譯を求めることは困難であるが、左記の如く假にアン(ガン)を「此」と譯し、ラガン及エイ(ゲイ)は共に「其」として、特に區別の必要がある場合には後者に「一般的」と註記することにした(m七〇頁参照)。

	人		物	
	(單)	(複)	(單)	(複)
此	ニガン	チリガン	チアン	アイガン
其	ニラガン	チリラガン	チラガン	アイラガン
其(一般的)	ニゲイ	チリゲイ	セイ	アイゲイ

此語は此處(此方)、其處(其方)の意にも用ひられ、又形容詞と同じくル(エル)を介して名詞に先行し、^{アトリビユチーヴ}庸^的にも用ひられることがある。此場合語尾のン、イが除却せられることは數詞と同様である。例

ニガ^(此)ル^(の)ガツ^(人) 此人
 チリゲ^(其等)ル^(の)ガツ^(人) 其等の人
 チア^(此)ル^(の)クラロ^(物) 此物
 アイゲ^(其等)ル^(の)クラロ^(物) 其等の物

強意の爲には獨立形(ン又はイのついた形)にイ又はイエを接頭し、或は「其處」を意味するギツといふ語分子を接尾する。例

イエニガン 此の此(人) ニガギツ 此處の此(人)
 イチリゲイ 其の其等(人) チリゲギツ 其處の其等(人)
 イチアン 此の此(物) チアギツ 此處の此(物)
 アイゲイ 其の其等(物) アイゲギツ 其等の其等(物)

此兩強意語分子は往々併用せられることがある。例

イエニガギツ 此の此處の此(人)
 イエニラガギツ 其の其處の其(人)

イセイギツ 其の其處の其(物)
 アイガギツ 此の此處の此等(物)

(三) 疑問代名詞

疑問の意を表示する語幹はタガ(誰)、ナラ(何)、テラ(幾干)及ゲル(問)の四である。タはカロリ
 ン及マーシャル語に於ては「何」の意であるが、其他はミクロネシア、マレイ、ポリネシアに類語は
 なく、之に反して偶合かも知れぬが、國語のタ、ト(誰、孰)、ナニ(何)、カ(歟)に近似して居る。
 ゲルはオゲルの形に於て動詞に用ひられることの他に、接尾語としては「何處」の意となり、示餘の
 三語幹はンを添付した獨立形其他二、三の複合語を派成する。此等を盡く代名詞と見なすことにつ
 いては疑があるが、便宜上一括してこゝに記述する。

タガン? 誰か
 タガ^(誰)ル^(の)ア^(人)ガツ? 誰の人か(誰か)

ナラン? 何か

ナラ^(何)ル^(他) クラロ 何のものか(何か)

テラン? 幾干か

テラ^(幾干)ル^(何) ガル? 幾干の價か

單複による區別はないが、人に在つては次の如き表現が用ひられることがある。

テルアタガン(チル・ウア・タガンの約) 誰の如き(如何なる)人々か

テ^(彼等)ナラ? 何の人々か——大衆についていふ

所有關係を表示する爲には名詞の屬格形(所有代名詞を接尾したもの)にタガンを連ねる。例

クロロクレル^(物) タガン? 誰の物か

ブリル^(家) タガン? 誰の家か

目的格又は補足格として「誰」「何」を用ひる場合にはタガ、ナラの形に於て句頭に位置することを例とする。之が爲に次に來る人稱代名詞(主格)には第三形式——否定語に連るもの(第七一頁)——が用ひられる。例

タガ(ナラ)^(誰) コム^(汝の) シイキ? 汝の求めるのは誰(何)か——誰(何)を汝は求めるか

テ^(人々)ナラ^(何) コム^(汝の) オシイク^(求) エル^(を) チル^(其等) 汝の之「複」を求めるのは何の人々か——汝はどの

人々を求めるか

タガ^(誰) コム^(汝の) ブサ(終止形ムサ)^(與) チア^(此) ル^(物) クラロ 汝の此物を與へるは誰か——汝は誰に

此物を與へるか

此場合左記の如くタガン、ナランの形を用ひ、エルを介して句末に置くことも可能であるが、寧ろ希用である。

ク^(汝) オシイク^(求) エル^(を) タガン(ナラン)? 汝は誰(何)を求めるか

チア^(此) ル^(物) クラロ^(汝) ケ^(汝) ムサ^(與) エル^(を) タガン 此物を汝は誰に與へるか

「如何なる人(物)」といふ意はウア(如)といふ語を連結して次のやうに表示せられる。

ヌアタガン(ニ・ウア・タガンの約)^(彼)

ヌアタガ^(人) ル^(何) ガヅ 如何なる人

ヌアナラン(ニ・ウア・ナランの約)^(其)

ヌアナラ ^(物)ル クラロ 如何なるもの

上掲のテルアタガンは此ヌアナタガンの複數である。

右の外ナランに作爲の意の接頭語分子メを冠したメナランは音便によりメグランとなり、「何する」といふ意の動詞に用ひられる。例

アク ^(我)メグラン? 私は何をしようか

ケ ^(汝)メグラン? 汝は何するか

(シ)ムレグラ(メグラの過去形) ブイク ^(少年)メン ^(西)リレベト(原形ルエマト)

少年は何して落ちた

か——少年はどうして落ちたか

「いつ」といふ意のゴイナランがナラン(何)の派成語なることは明白であるが、未だ語分子ゴイの原形、原義を詳にせぬ。——恐らくは形容詞の上級表示に用ひるゴイガ、ゴイサブと関係があるのであらう。

接尾語としてのゲルの用例は左の通りである。

ナルゲル ^(在)^(何處) ゴルセネム? ^(小刀)^(汝) 汝の小刀は何處にあるか

モゲル? ^(行)^(何處) 何處に行くか

ン ^(其)ウア ^(何處)ゲル ア ^(太陽)シルス? 太陽(日影)は何處邊か——「何時か」といふ意

(四) 不定代名詞

不定代名詞と見るべきものは左の諸語である。

タ(タン)。「一」の意の數詞であるが、次の如く「或」といふ意に轉用せられる。

ア・タル ^(人)アル ガヅ 或人

ア・タル ^(物)ア クラロ 或る物

ア・タル ^(何)ナラン いづれか

ダク ^(人)タル アル ガヅ 或る他の人

ダク ^(物)タル ア クラロ 或る他のもの

ダク ^(他)ベビル 或る他のもの「複」。例

ダク ^(人)ベビル アル ガヅ 或る他の人「複」

語——代名詞

グク^(他) ベビル^(二) ア クラロ^(物) 或る他のもの

ベク 各。例

ア^(各) ベク^(各) エル^(各) ア^(人) ガヅ 各人

ニ^(其)・ヂ^(唯) ル^(各) タン^(二) どれでも。例

メス^(與)ガク^(我) ア^(各) ニヂ^(各) ル^(各) タン^(二) どれでも呉れ

ニヂ^(各) ル^(各) タ^(各) ル^(各) マメヅ^(布) ア^(各) ウニル^(良) どの布も上等(である)

五、動 詞

(一) 原形(語幹)

動詞の原形(又は語幹)には名詞を其儘用ひるものと、之に或る語分子を接着したものとがある。例へばマヅ(死)は其儘動詞としても用ひられるが、——往々音便によつて少からぬ變化の起ることは後記の通りである——ナクル(名)はム・ナクルの形に於て始めて動詞形を備へるのである。其は

前者に在つては動的意義が含まれて居るからで、然らざるものは之にオ、メ其他の接頭語分子を冠し、若くはマ行の語音を挿入して動態を表示することを要するのである。——前章接頭及挿入語分子の項下参照。

原形は國語と同じく、動的意義を含んで居ても、形の上からは名詞と見なすべきものであるが、自動詞に在つては其儘終止法にも用ひられ、後述の過去形の外には何等の變化もない。左に若干例をあげる。

動詞形	原 語	動詞形	原 語
イミイト	經過	オアス	欠伸
オウマラン	信用	オクルクル	咳
オグレグル	笑	オスス	平身
オテブ	吠	オネル	答
オネロエル	口論	オムドウヅ	支拂
オメノイル	夕食	オルヂウ	呼
			ブルソイル
			ネレネル(反響)
			ガル(舌)
			ガル(問)
			ウドウヅ(珠貨)
			ヂウ(蚪)

語——動詞

カウネロエル	口論	ネレネル(反響)	カコアヅ	格闘	コダルル(死)
ギエイ	留		クアラム	忍耐	
クママルヅ	燃(焰)		グイプ	逸脱	
ゴセバクル	鳴		スエベク	飛	
スマウ	馴		シアブ	跳昇	
ヅウボク	生長		ヅオプ	陷	
ツオベヅ	外出		ドゴル	起立(立場)	
ナル	在(生存)		ンミルル	脱落	
ンメルト	沈下		メギウアイウ	眠	ガリウアイウ(睡眠)
メサウル	務	サウル(努力)	メナル	生活	ナル(生存)
メリル	散歩		メルル	愧づ	ルル(羞耻)
メルルムク	雷鳴	ヅルムク(雷)	メルロメス	晝になる	ルロメス(晝)
メレレス	繞る	セルス(垣)	モン	行	

モ・バヅ 就寢

バヅ(休息)

モンメイ 歸

ルマネル 泣

ルエベト 墜落

レボロブ 蹲踞

レミイヅ 去、出發

リイヅ(去)

之に反して他動詞に在つては終止法は接頭又は接尾語分子を連結して表現することを原則とし、原形は其儘之に用ひられることなく、既記の假設及否定代名詞に連用せられる場合、若くは複數終止形に於て時としては姿を現はすことがあるが(後記参照)、此場合にも若干の轉呼を免かれぬ。ことに語分子を接合したものに在つては、あらゆる音便變化を受けるので、之を原形に還元することは殆ど不可能の場合がある。例へばメサン、オメス、モエスと活用せられる動詞「見」の原形はマヅ(眼)から轉じたメスであらねばならぬが、ミウス、イサル、イムス、ウイウス等の形を有する「漕」といふ動詞がイウスを原形とするといふことは一見しただけでは想定が困難である、即ち極めて少數の例を除き、活用の一形としては存立せぬものであるから、寧ろ之を語幹と見るべきである。以下檢出し得られる限り、終止形と併せて之を掲げる。

(二) 終止形(動格)

他動詞に在つては上記の如く原形其儘では如實の動態を表示するに不適當とせられたので、之が爲に特種の接頭又は接尾語分子が連結せられるのであるが、之により左記の三様式に分れる。

- (一) 接尾形代名詞を連結するもの
- (二) 「作爲」の意の語分子を接頭(又は挿入)するもの
- (三) オ(ウ)を頭頭するもの

以下便宜の爲め(一)を語尾活用(尾活)、(二)(三)を語頭活用(頭活) a 及 b と稱へる。三様式中(三)はカロリン語の特色で(ch五一頁、k四八頁)、(一)はマーシヤル語の他動詞に於て之を見(m八七頁)、(二)はチャモロ語にも其形跡を存するが(ch五二頁)、マレー語の活用形式で、語分子其ものまでも全然同一である。之はパラウ語が四隣民族語の影響を受けたことを暗示するもので、恐らくは(一)が最も古い形式で、(二)(三)は後日發達したものであらうと思はれることは第四章に於て詳論する通りである。

右の三形は現在併用せられ、他動詞はいづれも頭活——(二)若くは(三)——及尾活の二形を備へて居るのであるが、上記の沿革を察せずして卒然之に對すれば、亂雜不規則な言語のやうに見えるのは當然で、ワルゼー僧正が捕捉に苦しんだのは無理のないことである。同師はメ(又はオ)を冠した形、即ち頭活 a 及 b を以て他動詞の呼稱形(Nennform)とし、之を基として爾餘の諸形を説かうと試みたのであるが、通則を見出し得ずして詳細な活用一覽表を添付して缺陷を補うた。其勞力は多とすべきであるが、しかく不規則なものであるならば、頭腦の單純な土人に到底使ひこなせる筈がない。事實は外觀よりも遙に簡單で、構成の原則と接頭、接尾語分子の原義を知れば、一、三の例を以て他を類推することも必しも不可能ではないのである。以下各様式について項を分つて記述する。

語尾活用。 原語又は語幹に代名詞を接尾して他動詞を表示するもので、既記の如く之に用ひられる接尾形代名詞に二種があるから(第七二頁)、活用形も亦二様式を備へ、人稱に應じて形を異にするのである。例

動詞「答うつ」——原語ゴレベツ(答)

自今格

至今格

一人稱〔單〕	ゴレベダク	ゴレベドク
二人稱〔單〕	ゴレベダウ	ゴレベトン
三人稱〔單〕	ゴレベヂ	ゴレベヂアン
自他稱	ゴレベヂヅ	ゴレベドヅ
一人稱〔複〕	ゴレベデマウ	ゴレベデメイ
二人稱〔複〕	ゴレベデミウ	ゴレベデメイ
三人稱〔複〕	ゴレベデリル(人) ゴレベヅ(物)	ゴレベデテレ(人) ゴレベダン(物)

右の如く各人稱に二形を備へたのは原始的時格觀念の發現で、單に動態を表示する——換言すれば名詞形から動詞形を分離する——のみでは、今から之を行ふことか、或は既に行うたことを意味するか判明せぬから、現利那を界として大體に於て今から先のこと(自今)と今より以前のことに(至今)との二格に區分したのである。國語に於てウツ(打)といふ動格からウテといふ決定格が分派せられ

たのも之と動機を同うするもので(拙著「日本言語學」改訂版一一九頁)、チャモ口語に在ても、語頭變化により且至今格を基準とする等の相違はあるが、同一觀念を以て動詞を活用して居る(由三七頁及五〇頁以下)。パラウに於ては後日外來思想の影響により、過去を表示する別個の形式が発生し(後記参照)、尾活にも之を適用するやうになつたので、至今格は殆ど用ひられぬが、尙慣用語句に残つて居る。例

アク^(我) ゴベレド^(我)ン 我は汝をこそ答うて——私は汝をば打つた

ワ僧正が之を現在完了格であると説いたのは此等の用例によるもので、外國語に譯するに當つては或は現在完了を以てするを可とする場合もあり得るが、此語法の本質は決して完了ではなく、島民の思想にも完了と過去との別があり得たとは考へられぬことである。

接尾せられた代名詞は目的格(又は補足格)を表示するのであるが、第三人稱(自今格)に限り、更に行爲の目的となる語を重ねて用ひることがある。例

アク^(我) ゴレベヂ^(彼) 私は彼を答うつ
 アク^(善) ゴレベヂ^(彼) 私は彼を答うつ
 アク ゴレベヂ ア^(少年) ブイク 私は少年を答うつ

後の例はブイクが接尾代名詞イ(彼)と同位格に用ひられたものとも解釋せられるが、此活用形を單に一終止法と見なしても大差はなく、接尾代名詞にはイの代りにル又はンを用ひることもある。複數を表示する場合も同様で、人にありてはテリルを用ひるが、物に對しては代名詞を缺くこと既述の通りである(第八一頁参照)。例

- (我) ロニル ア ムライ 私は舟を借る
 (借) (之) ア ムライ
 (見) (之) アク メサン ア ムライ 私は舟を見る
 (見) (之) アク ゴレベデテリル アル ガヅ 私は人々を答う
 (見) (舟) アク メス ア ムライ 私は舟「複」を見る

メスはメサンの語幹であるから、此例に於ては活用形は原形(語幹)と一致するのであるが、ロニルの複數はルメンで、語幹レンに活用語分子メを挿入することによつて表示せられる。此形は寧ろ語頭活用の變體と見るべきものであるから、次項に於て記述する。

語頭活用 a。「作爲」の意を以て接頭せられる語分子メがマの音便であることは前章に述べた通りで(第三〇頁)、マはチャモロ語に於てはファとも轉呼せられて接頭語分子として用ひられ(ch五二

頁)、中央カロリン語に在つてはア、マーシャル語に於てはカの形を以て使動を表現し、マレー語の活用語分子ム(m^e)とも語原を同うするものゝやうである。

此活用形を作るには語幹にメを接頭すればよいのであるが、之が爲に連約、轉呼が行はれるので、往々にして全然別語であるかの如き觀を呈することがある。左に若干例をあげ、尾活形(三人稱單數自今格)をも併記して参照に便にする。

頭活 a	尾活	語幹(原語)
メサクト 綁る	ソクチ	サクト(紐)
メスベヅ 報告する	スベヂ	スベヅ
メナウス 石灰を塗る	ゴウシ	ガウス(石灰)
メナト 燻す	ゴツル	ガト(煙)
メナン 食ふ	ゴリ	ガルル ゴガン (食物)
メナル 咀嚼する	コルヂ	カルヅ

メニヂダイ	高める	コイヂヂウル	キヂタイ〔形〕	高
メニルト	杓む	ギルチ	ギルト(杓子)	
メネシメル	閉づ	ゴスメリ	ガシメル(扉)	
メネヅン	馴らす	クヅニル	ケヅン〔形〕	從順
メネデサオグ	波立す	ゴテソギ	ガデサオグ(波)	
メネレベヅ	答うつ	ゴレベヂ	ゴレベヅ(答)	
メラウグ	行く	ドウギ	ダウク	
メラエル	傷く	レモリ	ラエル(道)	
メラスム	縫ふ	ロスマ	ラスム(針)	
メラデル	伴なふ	ノデリ	ナデル	
メラナブ	掩ふ	ドネビ	ダナブ(蓋)	
メラベク	綴る	ドベキ	タベク	
メリタイ	輾ぶ	トイウチル	チタイ(車)	

メルケヅ	罰する	ヌケヂ	ヌケヅ(罪)
メルゲト	はづす	エゲチ	エゲト
メルペグ	唾する	ツベキ	ツブ(唾)
メレゴイ	語る	トギニ	トゴイ(言)
メレセブ	点火する	セセビ	セセブ
メレル	釘着する	ヅメリ	デル(釘)
メレルス	垣する	ソルチ	セルス(垣)

右によれば大體に於て第一章所述の音便通則に従ふもので、ナ行の語音はラ行となり、カ(ガ及ガ)行、タ(ダ)行はナ行に、サ行、タ(ダ)行及ナ行はラ行の同列音に變化するのであるが、其いづれを**選ぶ**かについては標準が存せぬのみならず、上記の如く原形を求める事の困難なる場合もあるから、**附録**として他動詞の活用略表を掲げて檢出に便にした。

此形は目的格の人稱又は單複によつて變化することはなく、上記尾活形よりも遙に簡易であるから、現時は終止法として常用せられるのであるが、既述の如くペレリウ島の酋長が卑語として之を

擯斥した所を見ると(第四八頁)、比較的新しい語法であるのではあるまいか。之を目的語と連用する爲には常に助語エルを仲介とする。例

アク^(我) メネレベヅ^(管) エル^(を) ニ^(彼) 私は彼を管うつ
アク^(縫) メラスム^(衣) エル^(を) ビレム^(我) 私は汝の衣を縫ふ

左記の諸語はメを冠をせぬけれども、此活用に準じて用ひられる。

頭	活	尾	活	語	幹
ツゲル	バクル	潜る	ツゲル	バクリ	
ドイ	デレクル	乗込む	ドイ	デクリ	ヂテレクル
ロ	ガン	横へる	ロ	イアン	レガン

時としてはマ(メ又はモ)を第一語音の次に挿入することがある。——此場合の第一語音は本來接頭語分子であつたものと思はれるが、今は之を明にし得ぬ。——例

頭	活	尾	活	語	幹	
ク	メ	メルヅ	下船する	コ	ルヂ	ケルヅ

ガマ [△] オト	徒渉する	ガ [△] モチ ^X	ガ [△] オト
ガ [△] マト	褒める	ゴ [△] テニ	ガ [△] ト
ゲ [△] マウ	顧る	ゲ [△] マウニ ^X	ガ [△] ウ
ゲ [△] メイ	用便する	ゴ [△] ルチ	ゲ [△] イ
ゲ [△] モルヅ	放屁する	ゴ [△] ルヂ	ゴ [△] ルヅ
ツ [△] マク	踏昇る	ト [△] キル	タク
シ [△] マサク	昇る	ノ [△] セギ	ナ [△] サグ

上例中×印を以て標記したやうに、尾活に於ても往々マ又は其音便が挿入せられることがあるが、ことに其複數形には此例が多い。思ふに尾活に於ては複數事物に對する接尾代名詞を缺くが故に、原形即ち語幹に復元するので、之を區別する必要のある場合には此様式が用ひられるのであらう。左に其代表的の若干例を擧げる。

單數	複數	語	幹
エクリ	イマ [△] クル	分離する	エ [△] アクル

エセミ	イウ [△] アセム	模倣する	エアセム
ゴルチ	ゲメル [△] ト	用便する	ゲイ
ツ [△] モヂ	ツ [△] モオツ	串通する	タオツ
ヅメ [△] デシ	ヅメ [△] ダエス	分明にする	デダエス
ドクリ	ツマ [△] クル	埋葬する	ダクル(テブルル墓)
トテニ	ツ [△] マト	裂く	タト(デロメル植物)
ドレミ	ヅア [△] レム	植える	ドレム
ヌ	ン [△] マイ	納受する	ナイ
ノベキ	ヌア [△] ベク	削る	ナベク
ロトキ	ルマ [△] トク	追懐する	ラトク

語頭活用^り。チャモロ語及中央カロリン語に於て終止形標識に用ひられる接頭代名詞は人稱によつて其々相違するのであるが(ch四一頁、k四六頁)、パラウ語に在りてはウとオとの二形を存するのみで、ウは第一人稱單數に、オは爾餘の人稱に用ひられる。原語が其儘動詞語幹となるものに在

つては單に右の語分子を冠するのみであるが、然らざる場合には此活用形は次の如く構成せられる

- (一)メ又は其音便を原語に接頭して語幹をつくり、更に之にオを冠する。
- (二)原語にウ又はオ音を冠して語幹となし、——此ウ(オ)は作爲の意のム(マ)又はインドネシアの使動語分子パの轉音であらう——更に之にオルを接頭する(ルは補音)。此場合連約が行はれ且類化による韻の變化がある。

左に代表的な若干例をあげる。

頭活 b	尾活	語幹(原語)
オゲル 問ふ	ゴリル	ゲル(質問)
オガイ [△] ス 談る	ムギ [△] シ	ガイ [△] ス(談話)
オシ [△] イク 求む	(無)	シイク
オマイ [△] ル 纏ふ	ミリ	バイ [△] ル(衣)
オマ [△] ク 投錨する	ムクル	ウア [△] ク(錨)
オムシ [△] プス 鑽孔する	ムシ [△] プ	プシ [△] プス(錐)

オムブ	筌で漁る	ムニ	ブブ(筌)
オムルク	着色する	ムレキ	ブルク(色)
オメス	見る	メサン	メス(メヅ眼)
オメルロクル	傾く	メルレクリ	ヅルロクル(斜)
オモエス	射撃する	モシ	ボエス(銃、吹矢筒)

オムガル	投薬する	ムグルル	ムガル(ガル薬)
オムケツ	網で捕る	ムケヂ	ムケツ(ウケツ網)
オムガル(オメガル)	買ふ	メガラル	ムガル(ガル價)
オムドル	覆ふ	ムテルニ	ムドル(ドル覆)
オムナクル	命名する	ムネクリ	ムナクル(ナクル名)
オメギナル	据ゑる	メギネリル	メギナル(ギナル坐席)
オメグチルト	乾かす	メクヂチ	メグチルト(メヂルト乾)〔自〕

オメゴロ	鱗を去る	メゲルイ	メゴロ(ゴロ鱗)
オメシウル	操舵する	メシリ	メシウル(シウル舵)

オラブ	取る	オバン	オバ(原語不明)
オリセグ	教示する	ウイセギ	オイセグ(原語不明)
オルセベク	飛ばす	ウセベキ	オセベク(スエベク飛)〔自〕
オルツト	授乳する	ウツツル	オツト(ツト乳)
オルトベツ	搬出する	ウテベヂ	オトベツ(ツオベツ外出)
オレナオク	笛吹く	ンゴキ	オナオク(ナオク笛)
オレネセク	大小を序する	ウネセキ	オネアセク(ネアセアク小、幼)

オベス(尾活なし)、オグレグル(尾活なし)、オクルル(尾活ウクルクリ)、オコル(尾活ウグリ)等も他動詞、又は國語に於ては他動詞として用ひられる語であるが、自動詞と同様に原形(語幹)を其儘終止形に用ひる。——前二者の如きはパラウでは或は自動詞と見なされて居るのかも知れぬ。——

右の外オウ(所有)を冠したオウビリス(犬を有す)の如きも原形即終止形である。

此終止形の用法は上記頭活りと同様であるが、既記の如く前續代名詞(主格)が第一人稱單數の場合には常に語頭をウに轉音することを忘れぬやうにせねばならぬ。例

(我) アク (見) ウメス (を) エル (舟) ア ムライ 私は舟を見る
(彼) ニ (忘) オベス (を) エル (彼我) キヅ 彼は我々を忘れる

(三) 過去形

上述の諸形は皆現在格として用ひられ、時としては未來を表示し、尾活は自今格と至今格とに別たれるけれども、尙嚴格なる意味に於ける未來及過去格ではない。如實の未來を表示する爲には後記のやうに副詞又は接尾語分子を用ひ、過去格は動詞自體の變化によつて表現せられる。其構成は自動詞も他動詞も同様で、左記の如く終止形(現在形)にラ(又は其音便リ、ル、レ)音を添加することにある。此語分子はカロリン語のラ(去)と語原を同うするものと思はれるが、之を用ひて過去を表現することはパラウ語の特色である。

(二) 語頭活用動詞に在つては接頭語分子の次に添加し、前後の母韻は之が爲に多くは音便變化を受ける。例

現	在	過	去
メスベヅ	報告する	メルスベヅ	
メニタクル	謠ふ	ムレニタクル	
メラデル	伴する	メルラデル	
メラレム	植ゑる	メルラレム	
オベス	忘れる	ウレベス	
オメス	見る	ウレメス	
オラブ	取る	ウルラブ	
オルツタクル	訴へる	ウルツタクル	

接合語分子マが中間に挿入せられた動詞に在つては、マを除いて之に代へるにイラ(イレ)を以てする。例

ガマ [△] オト	渡渉する	ゲイ [○] ラ [○] オト
ガマ [△] ルス	逆る	ゲイ [○] ラ [○] ルス
ク [○] メ [○] ル [○] ヅ	乗込む	キレ [○] ル [○] ヅ
ン [△] マ [△] サク	昇る	ニラ [○] サ [○] グ
ツ [○] マ [△] ク	踏昇る	チラ [○] ク

(三) 語尾活用又は名詞を其儘轉用する自動詞に在つては第一語音の次にレ、ル(ラの音便)を挿入し、先行母韻は通例イに轉ずる。例

スエ [○] ベ [○] ク	飛ぶ	シレ [○] ベ [○] ク
レボ [○] ロ [○] ブ	坐する	リレ [○] ボ [○] ロ [○] ブ
エ [○] ク [○] リ	分つ	イレ [○] ク [○] リ
エ [○] デ [○] ニ	研く	イル [○] テ [○] ニ
ゴ [○] ム [○] ル	毀つ	ギル [○] ム [○] ル
ド [○] ゴ [○] ル	立つ	チル [○] ゴ [○] ル

ノ [○] テ [○] ギ	洗ひ落す	ニル [○] テ [○] キ
メ [○] サ [○] ン	見る	ミル [○] サ [○] ン

接合の爲め音便變化を來した動詞に在つては原形に復した上で過去に轉ずる。例

ヅ [○] ム(原語ヅ)	云ふ	ヂ [○] ル
ゴ [○] イ [○] テ [○] ク [○] リ(原語ギタクル)	譚ふ	ギ [○] リ [○] テ [○] ク [○] リ
ク [○] メ [○] ヅ(原語ケヅ)	近	キ [○] レ [○] ヅ
サ [○] ル	甚	シ [○] ラ [○] ル
ヂ [○] ル [○] ケ	尙未	ヂ [○] ル [○] ガ [○] ク

國語に譯すれば副詞又は形容詞等となるべき諸語にも過去形があるのは、パラウに於ては自動詞と同様に見なされたからであらう。例

但し動詞活用に準ずべからざる形容詞等の過去を表現するにはムラ(又はムレ)といふ語分子を先行して用ひることは後記の通りである(第二二三頁)。

(四) 受動形

パラウ語の特色は各他動詞に受動形を備へて居ることである。ポナペ語にも其痕跡を存するが、他のミクロネシア諸語には類のないことで、複文を用ひることの稀なる此民族の現代話術に於て果して其必要があるか、或ほどの程度まで實用せられるかは疑問であるが、ともかくも其形は存在するのである。之が爲には其頭活が a 種たると b 種たるとを問はず、原語(語幹)にメ(又はム)を接頭することを通則とする。此メ(ム)は次に掲ぐるメイ(來)又はモン(行)の語幹の轉用で、「成る」といふ意を有するものゝやうであるが、頭活 a の活用語分子メ(マ)と極めて近い音であるので、往々終止形と受動形とが一致することがある。例

語幹(原語)	頭 活	受 動
サクト(紐)	メサクト 綁る	メサクト 綁らる
スベツ	メスベツ 報告する	メスベツ 報告せらる

さりながら多くの場合受動形に在つては頭活 a に於けるが如き音便變化は起らず、比較的原形を保存するので、認識は容易である。——此も亦頭活 a の起原が新しいことの一證で、以前から存した受動形と區別する爲に故意に音便變化を與へたものと思はれる。——頭活 b に在つては接頭語分子オ(ウ)がメ(ム)に變化するから、一層區別が明白であるが、原語がバ行の語音を以て始まる場合、例へばボエス(銃)の如きものに在つては、之にメ(ム)を接頭すると類似音が重複するので、之に代へるにオを以てしてオボエス(射撃せられる)となし、終止形には音便を用ひ、オモエスと稱へて區別する。

此形にも亦過去格表示の必要があることは勿論で、之が爲に過去語分子が挿入せられることも終止形と同様であるが、其語音は接頭語分子メの類化により多くはレ(時としてはル、ロ)と轉呼せられる。例 動詞オメス(見)

アク ^(我)	モエス ^(被)見)	私が見られる
アク	モエス	
アク	モロウエス ^(了)被)見)	私が見られた

ワルレザ―僧正は此形を頭活から轉化したものであるかのやうに説き、頗る繁瑣なる標準をあげたが、音便による變化は寧ろ終止形にあること次の表を見ても明である。

原語(語幹)	頭	活	受動形
ゴガン(食物)	メナン	食ふ	メガン 食はれる
ゴレベツ(管)	メネレベツ	答うつ	メゲレベツ 答うたれる
ダウグ(傷)	メラウグ	傷く	メダウグ 傷けられる
ヌケヅ(罪)	メルケヅ	罰する	メヌケヅ 罰せられる
ガト	ガマト	褒る	メガト 褒られる
タク	ツマク	踏昇る	メタク 踏昇られる
ゲル(問)	オゲル	問ふ	メゲル 問はれる
ツト(乳)	オルツト	授乳する	モツト 授乳せられる
ナクル(名)	オムナクル	命名する	ムナクル 名づけられる
ギナル(坐席)	オメギナル	据ゑる	メギナル 据ゑられる
ウイセク	オクセク	教示する	モイセク 教へられる
ウトベヅ(ツオベス外出)	オルトベヅ	搬出する	モトベス 搬出せられる

ボエス(銃)	オモエス	射撃する	オボエス	撃たれる
ブルク(色)	オムルク	着色する	オブルク	着手せられる

(五) 名詞形

動詞就中自動詞の原形が名詞と見なさるべきものなることは既記の通で、爾餘の諸形は國語と同様に、准名詞として用ひることが出来る。例へばスエベク(飛)といふ語は動詞にも名詞にも用ひられ、ミウス(漕)、ムリウス(同上過去格)は名詞に準じてアミウス、アムリウスといふこともあるのである。

他動詞の原形は獨立した一語として用ひられることは稀で、諸活用形の語幹として、或る語分子を之に接着することを例とし、名詞形も亦に之に語分子ル(ネル)を接尾し、且多くは若干の音便變化をうけて構成せられる(第三七頁参照)。——過去形に在つては之を添へぬこともある——此ルは國語のノに相當する原語で、助語としてはエルの形に於て用ひられ、名詞に接尾して屬格をも表示するが、名詞形語分子となるのは、國語に於て「有ルノは」といって「有ルコトは」の意と解せられると

同一の理である。一例を挙げればメネレベツ(頭活)、ゴレベヂ(尾活)の語幹ゲレベヅ(答うち)にルをそへたゲレボデルは「答つこと」の意となり、ゲルレベヅは其過去形、即ち「答つたこと」である。ワ僧正が其構成區々にして端尻すべからずとしたのは、語頭活用形から導かれたものと誤解した爲で、少からぬ音便變化の起る場合でも、語幹から之を導くことは比較的容易である。左に既出の諸語について現在、過去兩名詞形を列擧する。——参照の爲め尾活形を添記した。

語幹(原語)

現在名詞形

過去名詞形

尾活

ウアク(錨)	オクウル	ウラク	ムクル 投錨
キヂダイ「形」(高)	キヂデウウル	クルヂダイ	コイヂデウル 高擧
ケヅン「形」(從順)	ケヅニイル	クルヅン	クヅニル 馴
ゲル 問	ゴリル	グリイル	グレル
ガウス(石灰)	ゴウイゲル	ゴロウイゲル	ゴウシ 塗石灰
ガシメル(扉)	ガスメルル	ガルスメル	ゴスメリ 閉
ガト(煙)	ゲツウル	ゲレツウル	ゴツル 燻

ギルト 杓	ゲルタルル	グリルト	ギルト
セルス(垣)	セルソルル	セルルス	ソルシ 圍
ダウグ 傷	ドエゲル	デラウグ	ドウギ
ダナブ(蓋)	ドノベル	デレノベル	ドネビ 覆
タバグ 補綴	テバゲル	テレバゲル	トベギ
チタイ(車)	チチウウル	テリタイ	トイチウル 輓
ツブ 唾	ツバオル	テルブ	ツバル
デル(釘)	デオルル	デレオルル	ヅメリ 釘着
トゴイ 言	テギウネル	テレギウネル	トギニ
ナデル 伴	ネダルル	ンラデル	ノデク
ヌケヅ(罪)	ヌカダル	ンルケヅ	ヌケヂ 所罰
バイル(衣)	ビウルル	ブリウル	ミリ 縫
ブシプス(錐)	ブセプサルル	ブルシプス	ムシプシ 鑽孔

ブルク (色)	ブルケル	ブルルケル	ムレキ 着色
ボエス (銃)	ベレガルル	ブララグ	メレギ 射撃
メス (メツ眼)	オソネル	ウレス	メサン
ラエル (道)	レアルル	ルラエル	レモリ 行
ラスム (針)	ルシメル	ルレシメル	ロスミ 縫
ムガル (ガル薬)	ウゲルウル	ウルガル	ムグルル
ムケツ (ケツ網)	ウカデル	ウルケツ	ムケヂ
ムガル (ガル價)	オゲラオル	ウレガル	ムガラル
ム・ドル (ドル被覆)	ウデルナルル	ウルドル	ムデルニ 覆
メギナル (ギナル坐席)	オギナルル	ウレギナル	メギネリル
メグチルト (メゲルト「自」)	オグヂタルル	ウレグチルト	メグヂチ
メ・ゴロ (ゴロ鱗)	オゴロアルル	ウレゴロ	メケルイ
オセベク (スエマク飛)	オセボケル	ウルセベク	ウセベキ 令飛

オツト (ツト乳) 授乳 オツツウル ウルツト ウツツル
 オトベツ (ツオマツ外出) 搬出 オデバネル ウルトベツ ウテベク
 オナオク (ナオク笛) 吹笛 オノカルル ウルレガオク ンゴキ

現在名詞形は往々純名詞即ち事物の名稱として用ひられる。ワ師は過去名詞形を完了分詞形と名づけたけれども、時格活用として之を用ひることは絶無である。

兩形共に普通の名詞と同様に所有代名詞を接尾することが可能である。例

グリイル 問ふこと	グライレク 我が問ふこと
グレル 問うたこと	グレレク 我が問うたこと
オソネル 見ること	オソネレク 我が見ること
ウレス 見たこと	ウレセク 我が見たこと

現在名詞形からは語頭にウレ又はウルを冠することによつて屑、滓、殘等を意味する名詞が作られる。但し此場合にも音便の變化を免かれぬ。例

デサゲル 木を伐ること	ウレルサゲル 斧屑
-------------	-----------

ンリテル	選ぶこと	ウレルリテル	選び残り
ガマゲル	噛むこと	ウルレマゲル	噛滓
ネバケル	削ること	ウルレバケル	鉋屑

希有な例ではあるが、動詞の語幹(原形)を疊合したのも亦複数を表示する名詞と見なされ、更に之に過去語分子ラ(レ、ル)を挿入することがある。例

原形(原語)	尾活	複数名詞
デル 釘	ヅメキ	デレダル
レデス 伸長	ロデシ	レデレデス
ゴルツ 放屁	ゴルチ	ゲレゴルツ
ダナブ 蓋	ドネビ	デレネダナブ
ツブ 唾	ツバル	テレブツブ

(六) 複合形

上記諸活用形は或る種の單語(若くは語分子)を結合することによつて意義又は含蓄に多少の變化を生ずる。結合分子中には接頭又は挿入語分子と見ることとも可能なものがあるので、既に第二章に之を掲げたが、其項下にも述べたやうに(第二二頁)、或ものは分離的性質を有し、獨立しても或は代名詞と接合した形に於ても用ひられるから、縦ひ動詞に接着する場合に於ても、之を一活用形と見ることが出來ぬ。此部類に屬するものは「作爲」「方向」「相互」「指小」「所有」等を意味する語法で、左に順を追うて記述する通りである。

作爲。「作爲」の意を表示する原語はマ(音便バ)である。語頭活用語分子メも亦之から出たものであるが、原義を離れて單に終止形の標識となり了つたから、爲すといふ意を明示する爲には更に之に冠する必要があるとせられた。國語に於て謠フと謠ヒナスといふ語法とが併立するやうに、パラウ語でも「謠ふ」の意の終止形メニタクル(頭活)、ゴイテクリ(尾活)は「謠ひなす」の意を以てマを冠してマメニタクル、マゴイタクリともなるのである。過去格に於ても之に相當する形の存することとは勿論で、マムレニタクル又はマギリテクリ(謠ひなした)といはれる。

此語分子は分離的であるので、命令法又は假設及打消代名詞が動詞に先行する場合には語頭から

離れて獨立し、或は代名詞を二分して其語尾分子に接頭する。例

原形(終止形) メギウアイウ 眠(自)

實叙法 (現在)

人稱	肯定的	否定的
一〔單〕	アク	デアク
二〔單〕	ケ	ケバム
三〔單〕	ン	エバレ
自他	ケヅ	ケデバデ
一〔複〕	キ	キバム
二〔複〕	コ	コバム
三〔複〕	テ	エバレ
一〔單〕	バク	アラク
	メギウアイウ	バク
		メギウアイウ

假設法 (現在)

一〔單〕	ゴバム	メギウアイウ	アラク	ケバム	メギウアイウ
二〔單〕	アバレ	〃	〃	エバレ	〃
三〔單〕	アバデ	〃	〃	ケデバデ	〃
自他	アキバム	〃	〃	キバム	〃
一〔複〕	ゴバム	〃	〃	コバム	〃
二〔複〕	アバレ	〃	〃	エバレ	〃
三〔複〕	〃	〃	〃	〃	〃

命令法。 バ メギウアイウ 眠れ

過去格に在りては右のバ、バム、バレ、バデがブラ、ブラム、ブラレ、ブラデとなることを異りとする。他動詞頭活及尾活も亦之に準ずる。

(註) 此マは正しく英語のdoに該當する。ワ僧正は此語法を「豫行」を表示するものと説き、「我先づ眠る」等と譯して時格の一種としたが、他に此語分子を右の如き意味に用ひた例もなく、其過去形ムラが單純なる過去表示に用ひられることを見ても(後記参照)、誤解とせざるを得ぬ。方向。 行動をいふ場合は勿論、行爲を意味する動詞に在ても往々方向を表示する必要がある。

國語に於て動詞「見」が「見入ル」「見ヤル」「見渡ス」の如く遣ひ分けられるのも之によるものであるが、パラウ語では之が爲に一形式が備はり、來往を意味する單語を結合することによつて表示せられる。既に指示代名詞の項下に述べたやうに、ミクロネシア諸島民の觀念によれば、來往は「此方へ來る」と「其方へ行く」との二方向の外に、彼此の關係を離れた一般的行動の表示を必要とするので、之が爲に次の三語が用ひられる。

連用形		獨立形		意義
現在	過去	現在	過去	
メ	ムレ	メイ	ムレイ	此方へ來る
イゴ	イルゴ	イゴン	イリゴン	其方へ行く
モ	ムロ	モン	モロン	行く(一般的)

此差別は西洋語には存在せず、國語に於ても明瞭を缺くから、以下便宜の爲めメを「來」、モを「行」と譯し、イリゴには「往」の字をあて、或は「其方へ」といふ語を冠して區別する。

現在格は未來を表示するにも用ひられ、來ヨウ、行カウといふ意を含むから、時としては意嚮の

表現とも了解せられ、上記の如く「成る」の意を以て受動語分子にも轉用せられるのである。

獨立形は純然たる自動詞で、次の如く用ひられる。

- (我) アク　メイ(ムレイ)　我來る(來た)
- アク　イゴン(イリゴン)　我其方へ行く(行つた)
- アク　モン(ムロン)　我行く(行つた)

之に反して連用形は他語に先行して動詞又は前置詞の用をなすことの外に(助語の項下参照)、行爲の方向を表示する語分子として用ひられ、就中メ及モは接合性を帯びて居る。例

- (我) アク　メ・メニタクル　我謠ひ來る
- (彼) エゴ(イゴの轉呼)　メニタクル　彼謠ひ行く(其方へ)
- (我) アク　モ・メニタクル　我謠ひ行く
- (丁) アク　ムレ・メギウアイウ　我眠り來た
- (彼) イリゴ　メギウアイウ　彼眠り行つた(其方へ)
- (子) ムロ・メギウアイウ　彼眠り行つた

右の如くメ、モは動詞に接頭するが、上記のマと同じく分離的であるから、假设又は打消語法に在つては、動詞から離れて先行代名詞の接尾語分子に接頭する。左に現在格假設法の打消を以て之を例示する。

原形	メ(モ)メギウアイウ	眠り来る(行く)
一人稱〔單〕	アラク	べ(ボ)ク
二人稱〔單〕	ケ	ベム(ボム)
三人稱〔單〕	エ	ベレ(ボレ)
自他稱	ケデ	ベデ(ボデ)
一人稱〔複〕	キ	ベム(ボム)
二人稱〔複〕	コ	ベム(ボム)
三人稱〔複〕	エ	ベレ(ボレ)
		若し我が眠りなすば
		若し汝が
		若し彼が
		若し我汝が
		若し我々が
		若し汝等が
		若し彼等が

イゴは接頭せぬから、先行代名詞と位置を代へる事があるのみで、其形には變化を及ぼさぬ。例
(若^(我)) アク イゴ (往^(眠)) メギウアイウ 若し我が眠らば

ゴム エゴ メギウアイウ 若し汝が眠らば
アル エゴン メギウアイウ 若し彼が眠らば
アラク イゴク メギウアイウ 若し我が眠らずは

此三語分子は又上記「作爲」の意のマ(ムラ)と連結してマメイ(ムラメイ)、マエゴン(ムラゴン)、マモン(ムラモン)となることがある。例

現	在	過	去	意	義
マメメニタク	クル	ムラメメニタク	クル	謠	ひ來なす(なした)
マエゴメニタク	クル	ムラエゴメニタク	クル	謠	ひ行(其方へ)なす(なした)
マモメニタク	クル	ムラモメニタク	クル	謠	ひ行きなす(なした)

相互。相互行爲を表示するには原形にカ(ガ又はカカ)を接頭する。例

オネロエル 罵——ガオネロエル 交罵
頭活) オコアツ 殺——カコアツ 果合
(オレネセウ 助——カカエネセウ 相互扶助

ゴレベヂ 答——ガゲレベヅ 打あふ
 尾活 ^クグデガデカル 饒舌——ガゲデグヅク 漫談
 コレモルミ 撥 ^ク——ガゲレモルム 撥り合ふ

指小。 語題にデ(唯)を冠し、且原語(又は語幹)を疊合し、若くは之にセセイ(少許)を接頭することによつて表現せられる。但し此場合頭活語分子メはメンに、オはオムに轉することがある。例

現在 過去

終止形メリル(モ・リイルの約轉か) 散歩

デ・メ・セシ・リル デ・メル・セシ・リル 小散策

終止形メラエル(モ・ラエルの轉) 歩行

デ・メ・レロル・デル デ・メル・レロル・デル 少し歩む

終止形メニタクル(メ・ギタクルの轉) 謡ふ

デ・メン・ゲギタクル デ・ムレン・ゲギタクル 少し謡ふ

終止形メラサグ(メ・ラサグ) 切る

デ・メ・レルセラサグ デ・メル・レルセラサグ 少し切る

終止形オメガル(オ・ベガルの約轉) 帆走

デ・オム・ベベガル デ・ウルム・ベベガル 少し帆走する

終止形メニガイ(メ・キゴイの約轉か) 泳

デ・メン・ゲギガイ デ・ムレン・ゲギガイ 少し泳ぐ

所有。 オウを接頭することによつて表示せられる(第二四頁参照)。例

ピリス 犬——オウピリス(過去ウルウピリス) 犬を有す

スコルス 杖——オウスコルス 杖を有す

クルロウ 巨大——オウクルロウ 大きさを有す

(七) 時

時相を表示する活用は現在及過去の二形のみで、現在形(終止形)は未來時格にも兼用せられ、語尾活用に在つては現在格が更に自今と至今との二格に分たれることは既記の通りである。其外には

時格活用と見るべきものはなく、ワ僧正が上記作爲及方向を表示する諸形を補助時格であるかのやうに説いたのは誤解に基くものゝやうである。我々が現在タ(タリの約)といふ語尾一つで過去諸時格を表示してさのみ不自由を感じぬと同様に、パラウ人も上記二格(又は三格)を以て用を辨じ、必要があれば左記の諸語(語分子)の助をかりて其不備を補ふのである。

ムラ(了)。マ(爲)ラ(去)の轉呼で、既記の過去形を准用することが不適當とせられる場合之に代用する。例

ゲシプ 汗かく—ムラ^(了) ゲシプ 汗かいた
カウ^(夜) ケ^(了) ムラ^(村) ル^(村) ア^(此方へ來) ベル エル メイ 汝は村から來たか
キ^(我々) ムラ^(了) ル^(了) ア^(學校) スクウル 我々は學校に居た

後の例に於ては「居」(又は「在」といふ語は用ひられて居らぬが、ムラに其意が含められたものと了解せられる。此例は尙卷末の文例九三—九六にも見える。

キロ。獨立形キロンは「殆」といふ意の副詞として用ひられるが、其語幹に代名詞を接尾した形は未來を表示する。例

キロ^(殆)・ク^(我) マヅ^(死) 我將に死なんとす
キロ^(殆)・ン^(彼) モル^(行) ル^(行) ア^(牢屋) カラブス 彼は牢屋に行かうとする

キロがケレと轉呼せられて「恐らくは」といふ意に用ひられることは後記の通りである。

アン(ガン)、ウン(グン、グン)〔接尾語〕。動詞に接尾してアン(ガン)は行爲の開始を表示し、

ウン(グン、グン)は今將に起らんとすることを表現する(第三四頁参照)。例

阿克^(我) メレマン^(來)(メレムはメイの變形か) 我來始める
阿克^(出發) リイダン 我發程する
阿克 リイヅン 我出發せんとする
阿克 モロラン^(行)(モ・ラエル・アンの約か) 我發程する
阿克 モロルン 我出發せんとする
阿克^(行) モガン 我行き始める
阿克 モグン 我行かんとする
阿克^(聞) ロネサン 我聞き始める

アク ロネスン 我聞かんとする

此接尾語は或る動詞に限つて用ひられるものか、或は一般に適用可能であるのか、尙之を詳にし得ぬ。

上述の如く複合時格を用ひることがないので、邦語のアリ(英語の have 等)に該當する助動詞も存在せぬ。「在」を意味する語はナルであるが、次の如く用ひられる外、活用することはない。

ナル^(在) チラガン 其處にある

ナルゲル^(在) ア ルグネク^(帽) 私帽子は何處にあるか

ナルニ^(在) エル^(我) ナク^(二個) テプロ^(の) ル^(球貨) ウドウヅ^(の) エル^(の) バラウ 我に二個のバラウ珠あり

彼はパラウ人ナリ(又はタリ)のやうに國語に於てはナリ(タリ)の如き助動詞を要する場合にも、バラウ語では述語たる名詞が直接に主語に連るのである。例

ニ^(彼) アル^(人) ベラウ 彼はパラウ人(である)

(八) 法

上述の諸形の外、バラウ語には動詞の活用によつて表示せられる語法はなく、又之を表現する助動詞も存在せぬが、既記の如く代名詞の或る形式が此用に供せられ、又ブルクル^(意義) アトゴイ^(言)と稱する國語の助語に類するものがあつて、其缺を補うて居る。左に之を列擧する。

命令。パラウ語の命令法は相手(第二人称)に對するのみならず、國語のベシ(ザルベカラズ、ネバナラヌ)と同様に、第三人稱及自他稱にも用ひられるが、動詞は尋常の終止形で、唯先行代名詞がム(二人稱單複)、エレ又はエル(三人稱單複)、ヅ(自他稱)であることを異りとする。但し一人稱及自他稱に在つては之を接頭して連約し、三人稱に於ては動詞の語頭が音便變化を受けることがある。

例

語幹メス(見)——頭活オメス、尾活メサン等

モメス(ム・オメズ^(見)の約) 汝(汝等)見よ

モサン(ム・メサン^(見)の約) 汝(汝等)之を見よ

エル オメス 彼(彼等)見ざるべからず

エル エサン(メサン^(見)の轉呼) 彼(彼等)之を見ざるべからず

ドメス(ツ・オメスの約) 我汝見ざるべからず
ドサン(ツ・メサンの約) 我汝之を見ざるべからず

打消の命令法即ち禁止法については後記打消の項下に述べる。

メを以て始まる語に在つては、第二人称命令法はマ行語音の重複を避ける爲に之を省畧する。例

終止形 { ムギウアイウ 眠
 メニタクル 謠
命令法 { ムギウアイウ 眠れ
 モニタクル 謠へ

又分離的語分子を冠した複合動詞に在つては左記の如く表現せられる。例

終止形メメギウアイウ 眠りなす
(爲) ムギウアイウ 汝(汝等)眠りなせ
(彼) エル バレ メギウアイウ 彼(彼等)眠りなさざるべからず
(我汝) デバ デメギウアイウ 我汝眠りなさざる可からず
終止形マモメギウアイウ 眠り行きなす
(爲) バ ポ ムギウアイウ 汝(汝等)眠り行きなせ

(彼) エレ (爲) バル (行) ボル (彼) メギウアイウ 彼(彼等)眠り行きなさざるべからず
(我汝) デバ (爲) デボ (我汝) デメギウアイウ 我々は眠り行きなさざる可からず

推量。ケレ(獨立形ケレン)といふ助語を用ひて表示する。此語は上記「殆」を意味するキロ(シ)から分化したものゝやうで、「恐らくは」といふ意にあたる。例

(恐らくは) ケレ (我) ケ マツ (死) エル (藥) ガル 汝は藥で死ぬだらう
(恐らくは) ケレ (我) ク モル (我) ア ベル、(村) ケレン (恐らくは) チアク (不) 私(は)村に行くだらう。彼は行かぬだらう

次の假設法も亦歸結句なしに用ひられる場合には推量と解せられる。例

(何) ナラ (若) コム (實) オルトラウ (何) エル (彼) ニ 何を汝は彼に賣るだらうか
(何) ア・タ (何) ル (汝等) ケミウ (若) ア (行) ボル (操舵) オメシウル 汝等の一人は舵を取(り得)るだらう

假定。國語モシ(若)に相當する原語はアであるが、——マール語、マオリ語では「然れども」を意味する——獨立して用ひられることは稀で、多くは接尾形代名詞と結合してアク、コム(又は汝等)アル又はアレ、アツ又はアデ、アキムとなり、既述の如く假設句の主語を構成する(第七四頁)。之に連る動詞は國語の見バ、聞カバ等(未然形)に當るものであるから、普通の終止形と

の間に區別があるべき筈で、次の「打消」の項下に添記する通りである。歸結句との連繫には助語エを用ひる(第一六二頁参照)。例

ゴム^{(若)(汝)} エサ^(見)(終止形メサ)^(複) デアルル、エケ^(汝) スベタク^{(告)(我)} 汝が若し舟^(複)を見れば我に告げよ

ゴム^{(了)(見)} イルサ^(過去形ミルサ) デアルル、エケ^(汝) シレベダク^{(了)(告)(我)} 汝が若し舟^(複)を見たらば私

に告げた(らう)

阿克^{(若)(我)} レネシ^{(聞)(之)} ア^(法器具) デブソク、エ阿克^(我) メ^(來) 私が若し法螺貝を聞かば私は來る(來む)

阿克^{(了)(聞)(之)} リレネル ア^(法器具) デブソク、エ阿克^{(了)(來)} ムレイ 私が若し法螺貝を聞いたらば私は來た(らう)

此アは次の形に於ても假定を表示する。

アレコン アレ、アムのレ、ムは補音、ンは獨立形を表示する語尾で、他語と連用する場合
アムコン }
阿克^(好)モン } には之を除く

此三語は本來同義で、指示の範圍に應じて其形を異にするに過ぎぬ(指定代名詞の項下参照)。ク^(好)モ^(好)はク^(好)モナク、ク^(好)モカウの如く用ひられる語幹であるが、打消に於ては^(不)デアク^(汝)ケム^{(好)(我)}ゴナク、ヂ阿克^(彼)エレ^{(好)(汝)}コカウ等となり、コニ^(之)の形に於て動詞としても用ひられるから、コを原語とすることは明白で、國語ヨシ(好)にあたる。さればヨシが「縦」の意に轉用せられると同様に、之に「若」を意味するアを冠したアレコ、アムコ、阿克^(好)モが假定の表示となることは敢て奇とするに足らぬ。例

アムコ^(若) ケ^(汝) ケツン^(善良) エケ^(汝) モル ア^(天界) バブルブテス 汝が若し善良ならば天國に行く

(であらう)

阿克^(若)スム ク^(我)エ ム^{(了)(行)}ロル ア^(行)ベル ルア^(の)ガブ、エク^(我)ウレメス アル^(人)ガツ

エル^(の)ア ノバルツ 私が若しヤツブ島に赴いたなら西洋人を見たであらう

アレゴンは少しく違つた意味にも轉用せられる。

(一)「要スレバ」と譯すべき場合。例

アレコ^(我)クメルケス 要すれば私は書く

(二)「如聞」と譯し得る場合。例

マラ^(我) ル エコ(アレコの轉) ケ^(我) モル^(我) ア ベル^(我) ル^(我) ア ガ^(我) プ 汝はヤップ島に行く
と聞いたが真か

アレコン^(我) ムラ^(我) ル アネ^(他名) アウル 彼はネアウルに居たと聞く

(三)「ものを」と譯せらるべき場合。例

アレコ^(我) ク メ^(伐木) ラサク エ^(然るに) ク マ^(我) ル メリ^(痛) ネル^(我) ア ギ^(腕) イマ^(我) ク 私の腕が非常に痛まな
れば木を伐らうものを

時としては諷刺的にも之を用ひることがある。例へば作業中のものに關し、聞えよがしに傍の人に
向うて

アレコン^(彼) ウレ^(働) オル

といへば「働くらし」といふ意になり、其ものは面目を施すのである。

アク^(無) モンの語分子ク^(無) モは又ル(エル)と連ねて句を承けるに用ひられること助語の項下に述べ
る通りである。

打消。 否定を表示する語はデアク(過去ヂムラク)のみで、「無」「不」を意味し、副詞的にも述語

的にも用ひられる。例

デアク^(不) ウルウル(終止形メルウル) ア ナラン 何もせぬ

ヂム^(了) ラク^(不) ア ゴレ^(善) ベダ^(我) ク 私を答つことはなかつた

ン^(其) デ^(無) アク^(無) ア ガリ^(嚙煙草) ウヅ^(其) エル^(其) ニ 其には嚙煙草はない

ケレ^(恐らくは) ク^(我) モル^(行) ア ベル^(村)、ケレ^(恐らくは) ン^(彼) デ^(不) アク 私に村に行くだらう。彼は行くまい

さりながら普通は主格となるべき代名詞に先行して打消を表示すること既記の通りである(代名詞の
項下参照)。例

デアク^(不) ク^(我) ウル^(了) ル^(善) ゲス(終止形メルゲス) || デム^(了) ラク^(不) ク^(我) ウル^(善) ゲス 私は書かなかつた假

設法の打消に用ひられるアラクはアルとデアクとが連約せられたもので、打消の命令法即ち禁止
法に在つては其構成を詳にせぬが、ラケ、ラコ、ラクと轉化する(命令法の項下参照)。例

ラケ^(勿) モ^(汝) エス^(見) 見るな
ラコ^(勿) モ^(汝) エス^(見) 汝等見るな
ラク^(勿) エル^(彼) オ^(見) メス 彼(彼等)見るべからず

ラケ^(勿) ドメス^(我汝見) 我汝見るべからず

「尙未」を意味するデリガクも亦右のデアクから分化したものと思はれる。例

デリガク^(尙未) ク^(我) ウルゲス^(終止形メルゲス) 我尙未だ書かざりき

デアク又はアラクが助動詞的に用ひられる場合、換言すれば動詞が直接又は主格たる代名詞を介して之に連用せられる場合には、上例に於て見るが如く、終止形の代りに特種形を用ひることがある。此は國語の未然形に相當するもので、上記假設法に於けると同一の理であるが、パラウに於ては特別の一活用形を形成するに至らず、動詞の原形を用ひることを原則とし、多くは之にオ(單數一人稱に在つてはウ)を接頭する。此オ(ウ)は恐らくは冠詞アの轉呼で、原形が名詞的に用ひられた事を標識するものであつたのであらう。上例のヂムラクアゴレベダク^(我)の如きは其一證である。左に若干例を擧げる。——終止形を併記して参照の便に供する。

(一) 純原形。マを挿入することによつて終止形を構成するものに在つては、之を除いて原形に復する。例

原形(未然形)	終止形	原形(未然形)	終止形
ガオト 渡渉	カマオト	ガルス 迸出	カマルス
ガウ 顧	ゲマウ	ギイス 遁走	ゲミイス
ヅ 云	ヅム	ヅム 出現	ヅムム
ケルヅ 下船	クヌメルヅ	コルル 失脚	クヌモルル
イイト 過失	イミイト		

右の外終止形とする爲に音便變化を起したのも亦原形に還元せられる。例

ベチク 發見	メチク	ベスカウ ^(興) 與レ汝	メスカウ
ヂデレクル 乗込	ドイデクル	ケネイ 許	コネイ

マ、メ、モ等を連結した複合動詞(第一二四頁以下参照)は之を原形と見て其儘未然形に代用するのであるが、此場合にはバ、ベ、ボと轉呼せられる。

(二) 尾活未然形。尾活形は其儘之に用ひられるが、代名詞を接尾する爲に語幹に音便變化を起したものに在つては之を原形に復することがあり、或は爲に若干の變化を生ずることがある。例

未然形

終止形

未然形

終止形

ギテクリ 謠之

ゴイテクリ

エサン 見之

メサン

レネシ 聞之

ロネシ

(三) オ(ウ)形。

頭活bに在つては未然形も終止形も共にオ(ウ)を接頭するので、一致を見るのであるが、頭活aに於ては接頭語分子メを除き、之に代へるにオ(ウ)を以てする結果、殆ど面目を一變する。——此場合若干の音便變化が起ることがある。——例

オメス 見

オメス

オニタクル 謠

メニタクル

オレネス 聞

オレネス

オイウス 漕

ミウス

上記いづれの場合に於ても別に過去形の存することは勿論で、終止法と同じくラ行語音を挿入することによつて表示せられるのである。

疑問。特に疑問を表示する助語(國語のカ、ヤにあたるもの)又は記號(?の如きもの)は存在せず、既記の疑問代名詞が之に用ひられることの外は單に語勢によつて區別せられる。例

タガ (誰) ゴム (若) ギルレベチ (了) (答) 誰を汝は答つたか

ケ (汝) ムレグラ (了) (何處) 汝は何をするか

ケ (汝) ムラ (了) メルゲス (を) エル (算術) ア (木) ゴクゲル 汝は算術を書いたか

アドルト (樹名) ン (其) メツク (堅) エル (木) ゲルレガル アドルトは堅い木か

テ (彼等) ギルレベダウ (汝) 彼等は汝を答つたか

ヂムラク (了) (不) ケ・メサン (見) (ケム・エサンの約) 汝は其を見たか

時としては主格代名詞を略することがあり、或は獨立形と連用形とを重ねて之に用ひることがある。例

ムラ (了) (何處) ル (母) ゲル (汝) ア (母) ダラム 汝の母は何處に居たか

カウ (汝) ケ (汝) ミゴ 汝は盲目か

カウ (汝) ケ (汝) ムラ (了) (村) ル (村) ア (此方) ベル (來) エル (此方) メイ 汝は村から來たか

希望及可能。此語法を表示する助動詞又は助語は存在せぬが、名詞サウ(好)及ギト(惡)の屬格を以て希望及其打消に代用し、セベク(能)の屬格を可能法に用ひる。此三語は人稱によつて次の如く變化する。

サウ。——ソアク、ソアム、ソアル、ソマツ、ソママ、ソミウ、ソリル

(註)「我愛人」等の意に用ひる場合にはソネク、ソネウ等といふ

ギト。——ゲチク、ゲチム、ゲチル、ゲチツ、ゲチナム、ゲチミウ、ゲチリル

セベグ。——セベグク、セベグム、セベグル、セベケツ、セベゲナム、セベゲミウ、セベゲリル

左に二、三用例をあげる。

ナラ ソアム 汝の欲するは何か(汝は何を欲するか)

ア テルギブ エル ア マメヅ ア ソアク 我が欲するは少許の布(私は少許の布を希

望する)

タガ ゲチム 汝の悪むは誰か(汝は誰を欲せぬか)

ン セベケム エル メリゲス 棹さすことは汝に可能か(汝は棹を遣ひ得るか)

チアク ア セベグク エル メリゲス 棹さすことは私の能ではない(私は棹をつかふこ

とが出来ぬ)

サウ及ギトは又ソコク、ソコム、ソママ等及ゲチコク、ゲチコム、ゲチコル、ゲチナム等の如

き形をも備へ、従前は然らざりしかども今は之を好(悪)むといふ意を表現するに用ひる。

時としてはメヅク(堪)といふ動詞を「能」、メチツル(不堪)を「不能」の意に用ひることがある。例

ケ メヅク エル オメガルル 汝は帆走を解するか(帆走することが出来るか)

アク メチツル 我不堪(私は出来ぬ)

受動。 受動法には上記の受動形を用ひるのであるが、西洋語ならば受動法によつて表現せらる

べき場合にも、多くは尋常語法によること國語と同様である。例

テ ギルレバダウ 彼等は汝を答つた。——汝は答たれた

使動。 パラウ語には特別使動形は存在せず、他動詞中に含まれるのであるが、就中其原形がウ

(オ)又はメグを以て始まるものは多くは之に屬する。蓋し此ウ(オ)にはインドネシア語のパ即ち使

動語分子から轉訛したものが多く(第一〇五頁参照)、又メは作爲を意味するマの轉呼で、國語のシ

(爲)と同じく、使動表示にも轉用し得られるものであるが、尙行爲又は形容の表示(第三〇頁)と區

別する爲にグ音を添へたのである。例

原語

原形

尾活

頭活

スエベク〔自〕	飛	オセベク	ウセベキ	オルセベク	令飛
ヌイベス〔自〕	美	オニベス	ウンベシ	オレニベス	令美
イドクル〔自〕	穢	メギドクル	メギヂケリ	オメギドクル	令穢
サウ〔名〕	愛	メグサウ	メグソニ	オメグサウ	令馴染

右の如く頭活形として用ひる爲にはメグに在つては之にオを冠し、ウ(オ)に在つてはオル(ルは補音)を接頭するのである。

六、副 詞

固有副詞。形態上副詞を標識するものはないが、左記の諸語は意義上副詞的に専用せられる。

- アルタエ。恐らくは、多分
 ウア。如——例 ^(其)ン ^(如)ウア ^(其)イ・セイ 其通り
 キロン。殆——第一三〇頁参照。
 グク。更に、尙

クママル。甚——動詞としてはサル(過去シラル)が用ひられる。

クルサクル。故(由)——動詞クスケリ(故なり)と同原。常にメ(來)を添へて用ひる。例

- クルサクル ^(由)メ ^(來)ケ ^(來)メ ^(此處)ル ^(於)チ ^(今日)ア ^(於)ン エル ^(於)ゲイ ^(於)ラ ^(於)ガン 何の爲に汝は今日此處に来るか
 クルサクル ^(由)メ ^(來)ケ ^(來)メ ^(來)ネ ^(來)ン ^(來)メル ^(來)ル ^(來)ア ^(來)ツ ^(來)ア ^(來)ネル 何故に汝は扉を閉めるか

ケレン。恐らくは——動詞推量法の項下参照。——例

- ケレン ^(恐らくは)ク ^(我)モン ^(行)恐らくは私は行く(だらう)

コラ。如——例 ^(彼)ン ^(如)コラ ^(死)メ ^(死)デイ 彼は死せるが如し

ゴシシウ。等——助語マ(と)を添へて用ひる。例

- ノシシウ ^(其)ン ^(其)ゴシシウ ^(等)の約 ^(其)マ ^(水)ラルム 其は水と等しい
 ニ ^(其)マ ^(水)ラルム ^(其)ノシシウ 其と水とは等しい

時としては「同様」又は「どちらでもよい」といふ意になる。此場合には次のヂ(唯)を冠することが多い。例

- ヂ・オシシウ ^(唯) ^(其) ^(等) アク ^(我) マヅ ^(死) マ ^(其) アラク ^(卷) ^(不) 我は生と死と同様である

ゴボエ。原義を明にせねが、國語の「さもあらばあれ」「縦しや」といふ意にあたるものゝやうである。例

ゴボエ ^(不良)メクニイ ^(然るに)エケ ^(汝)メレゴイ ^(其)ン ^(良)ウニル 良くないのに汝は其良しといふ
ゴボエ ^(我)アク ^(發見)ベチク ^(を)エル ^(人)ア ^(我)ガツ ^(何爲)アク ^(何爲)メグラ 縦し私が人を見付けても私は何としようや

ゴボエ ^(其)ン ^(良)ウニル ^(物)ル ^(然るに)クラロ ^(彼)エン ^(地)キリチ 其は良い物であるのに彼は棄てる

デ。唯、僅——例 ^(聊)ヂ・ウニル、^(唯)ヂ・メリル

デルケ。尙——例 ^(尙)デルケ ^(母)ベグス

デルレク。又、同じく

右の外又アナラン(如何様)、メルグラ(何爲)、^(何)ナラ・^(純原)ウクル(何故)、^(何)ナラ ^(目的)ウルツテルの如き疑問語も亦副詞的に用ひられる。——代名詞の項下参照。

諸否。諸否、當否等を表示する爲には左記諸語が用ひられる。此も亦副詞の一種と見るべきであらう。

オイ。はい、おう(唯々)、然り

ヂアク。いや(否)——動詞「打消」の項下参照。

アダシ。然り

マラ ^(實)ル ^(の)トゴイ ^(言) 本當

ン ^(其)ウニル ^(位置)ベスル ^(其) 其の通り

ン ^(其)ムタゲル ^(逆)ベスル ^(位置) 間違

メニクト ^(悪) 不可

場所。場所、方位等を意味する名詞、代名詞等は副詞としても用ひられる。此場合は次項の助語ナル(在)及モ(行)を冠して「に」及「へ」の意を表示することもある。左に其主なるものを擧げる。

デル。何處——ナルゲル 何處に、モルゲル 何處へ——例

カウ ^(我)ケ ^(汝)ガツ ^(人)エル ^(の)ゲル ^(何處) 汝は何處の人か

カウ ^(了)ケ ^(何處)ムラルゲル 汝は何處に居たか

チアン。此處——ナル・チアン 此處に

語——副詞

セイ。 其處——ナル・セイ 其處に
 メイ。 此方へ——ナルメイ 此處に
 モン。 彼方へ——ナラモン 彼方に
 ガレプラベル(動詞)メネブラベル(動詞)の過去名詞形。 傍——例 ガレプラベル エル(の) ナク(我) 我が傍
 ウゲイ。 前——ナル・ウゲイ 前に——例 ナルウゲル(の) ナク(我) 我前に

以下の諸語は名詞で、常に屬格形に於て副詞に用ひられる。従つて人稱に應じて形を異にするのであるが、こゝには其一形のみをあげる。

ウリウル。 後——ナル ウリウル 後に——例
 ウルレク 我後、 ナル ウルレム 汝の後に
 カツル。 左——ナル ア カツル 左に——例
 キトルク 我左 ナル ア キトルク 我左に
 キトルル(の) アギイマク(我) 我左腕
 カヂクム。 右——ナル ア カヂクム 右に——例

キデクメク(我) 我右
 キデルメル(の) ア マダク(我) 我右眼
 バブ。 上——ナラバブ 上に、 モラバブ 上へ——例
 ベブク(我) 我上、 ナラベブム(我) 汝の上に
 ゲオウ(エオウ)。 下——ナレオウ 下に、 モレオウ 下へ——例
 ゲウネク(我) 我下、 ナレオウネム(我) 汝の下に
 ガルセル(の)。 内——此一形のみ——例
 ナル ア ガルセル(の) ア ブライ(家) 家の内に
 イイクル。 外——ナリクル 外に、 モリクル 外へ——例
 ナル ア イクレル(外) ア ブライ(家) 家の外に
 プル。 中央——ナル ア プル 中央に
 ナル ア プルの形式は人に對してのみ用ひられ、一般(人及事物)にはナルア(中)プリネル(の)といひ、又ナルアゲヅル(目名)(ガリツの屬格)を代用する。

デルイルル。 間——ナル ア デルイルル 間に——例

ナル ア デロネレツ(我汝)(又はデリウツ) 我と汝との間に

ナル ア デロネレル(の) ア ブライ(家) マ(ミ) ガデス(鋪石道) 家と道路との間に

ビタン。 側——ナル ア ビタン 側に——例

ナル ア ビテロネク(我) 我側に

ケツ。 近——動詞ク_メメツも之に代用せられる。——例

ナル ア ケデク(我) 又はナル ア ク_メメク 我附近に

ゴロイツ。 遠——ナル ゴロイツ 遠方に——例

ナル ゲルリデク(我) 我遠方に

上記諸語就中ナル及モを冠した形は前置詞と見なすことも出来る。又方位を表示するには左記諸語を用ひる。

デルグス。 北——デルグス ア ノバルツ(西) 北西、デルグス・オノス(東) 北東

ヂムス。 南——ヂムス ア ノバルツ(西) 南西

ゴノス。 東——ヂムス・オノス 南東
ノバルツ。 西

時。 時日を表示する副詞も亦本来其意味の名詞又は代名詞で、常用のものは左の諸語である。

ゴイナラン。 何時——疑問代名詞の項下参照。

プレゴイエル。 常——多くはデ(唯)と連結してヂ・プレゴイル(常なり)、ヂ・ムレ・プレゴイル(了)

(常なりき)の形に於て用ひられる。

ガレガル。 恒久、不斷

ヂアク(無) ア ウレボネル(終)(其) 無限

ア・イラガル 以前

エウムツ 太古——「苔」といふ意にも用られる

ゲイラガン。 今

ゲイラガ(今) ル(の) ラク(年) 今年

ゲイラガ(今) ル(の) ブイエル(月) 今月

語——副詞

ゲイラガ ^(の)ル ^(日)シルス 今日

ソラン。今後、爾今——エソラン 乃で

クグク 朝、旦

クルグク(クグクの派成語) 明朝、明日

ニアウス 明後日

ニアウセル 明々後日

^(以後)イクレル ^(の)ニアウセル

後日

^(二)ア・タル ^(の)ニアウセル

ゲリシブ、ゲイ 昨日

イデリシブ 一昨日

イデルサベル 一昨々日

シルス 日、太陽

ノサガ(ナサグ・アの約、ナサグは^(昇)マサグの語幹) シルス 日出

ノルタ(ノルト・アの約、ノルトは^(降)ノルトの語幹) シルス 日没

^(如)ウア ^(何處)ゲル ^(日)ア ^(日)シルス 日は何處邊(に來た)か——「何時か」といふ意

^(良)ウニ ^(の)タガレル(ツゲルの屬格) ^(日)ア ^(日)シルス 日が可なり高い——「日三竿」の意

^(其)ン ^(五)エイム ^(日)エル ^(日)シルス 五日(である)

カベセネイ。七つ下り(午後四時、五時の交)

クレベセイ。夜——パラウでは夜を以て日を數へることを例とするから、クレベセイといふ語

は往々シルス(日)と通用せられる。

ナル ^(幾手)ア ^(の)クレベセイ 夜間に

テラ ^(其)ル ^(の)クレベセイ 幾夜(幾日)

ン ^(四)エオア ^(日)ル ^(日)クレベセイ 四夜(四日)

ア・タル ^(二)ル ^(の)ア ^(日)クレベセイ 或夜(或日)

メツダ(メチウツ、アの約) ^(被)クレベセイ 夜半

ケスス。宵、昨夕

ケスス ^(の)エル ^(昨日)ケリ 昨夕

ケスス ^(の)エル ^(昨日)ア イデリシブ 一昨夕

デルケ ^(荷)ケスス 尙宵(なり)

ケケスス(ケススの指小形) 初更、宵の口

クルスス(ケススの派成語) 明夕

クルスス ^(の)エル ^(明日)ア クルグク 明夕

クルスス ^(の)エル ^(明日)ニアウス 明後日の夕

ツタウ 拂曉、夙——早朝鳴く小禽の名にも用ひられる

オルメトメラ ^(冠)オル・メトメル・アの約 ^(冠)エル ^(冠)トルヅム 早朝——トルヅムの泳ぎ廻るを明に

認め得る時刻といふ意

オムゴクル 早起——早朝から或る事を始めるといふ意の動詞である

ルロメス 明、明るい時

ナル ^(の)ア ^(の)ルロメス 明るい時に

ガエオス 晝前

ガルデガエオス 日中

ゴランゲラ ^(古)ル ^(の)ア・ガツ 黄昏——誰彼時といふ意

パラウ男子の日常行事は糖汁搾取の爲め椰子の花序を切削ぐことにあるので、其時刻を表示する特別の用語がある。花序は開花に先ち頂端を切り去るのであるが、切口が乾燥すると、糖汁の滲出を阻止するから、日々薄片を切りついで創面を新にする必要がある。——英語では之をタッピングと稱へる——此作業は毎日三回行はれ、朝夕は同時に液汁を採收するが、日中は單に乾いた表面を切り取るのみで、前者をソネソネル(頭活メレネス)といひ、後者をスバデル(頭活メスマツ)と稱へる。之から左記の言葉が出た。

ゴスバデラン。 日中切削時

ゴスバデラ(ゴスバデル・アの約)シルス ^(日) 午時——中央部では正午頃之を行ふことを例とする

から、此時刻の稱呼に用ひられるのである。

ゴスバテラ ^(の)ル ^(東)ノス 午前九時、十時の交——^(東)ゴノス(東海岸)に於てはスバデルが此時刻

語——副詞

に行はれる。

イエ(正) タ(二) ゴスバデル スパデル後一時間

テベデラ(取去) (ツオハエスの變形か) ル(四) メネレス 早朝五時頃及午後四時頃——ソネソネルの時刻

ロダラ(取去) (ロデリ) ル(七) ア トリオグ 黄昏までに尙十本を切剥ぎ得る時刻——午後五時頃

ロダラ(五) ル(五) ゲイム 同しく五本を切剥ぎ得る時刻——五時半過

附記

一、パラウ語のラク(年)は我々の半年にあたり、季節風によつて之を(東)ゴノス(東風年)又は(西)ノバル(西風年)とよび、兩年度共に左記の六ヶ月(ブイエル)に分たれる。

第一月。ブイク(少年) エル(の) ツムムル ツムムルの少年(ツムムルの語義不明)

第二月。グオテル(老) ツムムル 老いたるツムムル

第三月。モダラプ(原義不明)——此月には落潮が少い

第四月。ガリツ(中央) (ゲヅル) ア(年) ラク——年の半

第五月。ゴルノデル(結ぶこと)——此月には島民は脂の乗つた鳩を罟で誘き寄せ、吹矢を以

て射て捕る爲め、原野に假廬を結ぶから此名を得たのであらう。

第六月。ガイアク(原義不明) 多くの植物が芽ばへ花さく月。——此故にゲイラクは彌生

といふ意にも用ひられる。
右の六ヶ月の外に兩年の間にラウツ(風候不定)と稱する一ヶ月があり、其前半は(東)ゴノス(東風年)に、後半は(西)ノバル(西風年)に屬する。月名は村々によつて多少の相違がある。例へば北部に於てはブイク エル ツムムル(第一月)をタオグといひ、ガリツ(四月)はアラク(母) (ア・ダラク(我)の約)又はア・メゲルリ(出生) (メ・ベラウ(之) (パラウが生まれる)ともいふ。後の二者は全島到る所で用ひられる。

二、太陰の盈虧は次の如く表現せられる。

ゴラキルー 満月

ロケヅ(裂斷) ブイエル(月) 新月

ゲセブ(崩斷) 弦月——弦月の頃は宵又は曉に於ても月は中空にかゝつて居るので、之を仰ぎ見ること久しきに及べば頸の骨がちぎれると云はれる

ゲセブ エル^(の) ア ノバルツ 上弦
 ゲセブ エル^(の) ノス 下弦
 クレメレム 暗^{ヤミ}(満月後の十五日)
 タブ^(上昇)(ツアブの約) エル^(の) ブイル^(月) 三日月

三、潮時については次の如き表現が用ひられる。

クリイク 上げ汐(漲潮)
 ガラガス 下げ汐(落潮)
 レボロブ^(安坐) ア ダオブ^(海) 上げ汐のたるみ
 マゲツ ア ゲイ^(岩礁) 底干——岩礁面が乾くといふ意であるが、マゲツの原語を詳にせぬ
 ドログ 満潮(一般的にいふ)
 クルナ^(大)(クロウ・アの約) ドログ 大潮
 デレゲル^(増加)^(の) ア コラキルー^(満月) 満月の大潮
 デレゲル タブ^(三日月)(エル)ブイル 新月の大潮

メネアイ 小潮
 メネアイ エル^(の) ノス^(東) 下弦の小潮
 メネアイ エル^(の) ノバルツ^(西) 上弦の小潮
 タル^(の) イイト^(經過) 小潮後の第一日
 ネル^(シ・エルの約)^(二) ル イイト 同第二日
 ネデ^(シ・エテの約)^(三) ル イイト 同第三日

七、助 語

上述の諸品詞(及後記の感動詞)に属せずして補助的にのみ用ひられる語を假に助語と名づけた。語義からいへば西洋語の前置詞に近いもの、或は接續詞に該當するものもあるが、用法上之を區別することは困難で、且其孰れにも属せぬものもあるから、一括して之を同一類と見ることが便とする。パラウ語では其或ものをブルクル^(冠義)アトゴイ^(冠義)とよび、動詞の諸法を表示する助に用ひられることは上記の通りであるが、尙記述に漏れたもの及説明の足らざりしものを左に列挙する。

ア。 名詞及准名詞に冠して用ひられる語分子で、接頭語とも冠詞とも見られることは既記の通りである(第二頁及四三頁参照)。ア・ムライア(冊)クロウ(大)の如く用ひられる場合には後のアは主語と述語とを繋ぐ助語であるかのやうに見えるが(ワ僧正はさう説いた)、其實はクロウ(大)が准名詞として用ひられた事を表示するもので、パラウ語に於ては此場合連繫助語を必要とせぬのである。――

本章名詞の項下並に次章参照。
アル。 アは「若」の意で接頭語分子として用ひられることは既記の通りであるが(第二三頁)、アルの形に於ては獨立語として他語と連用せられる。例

グロイ(故)アル。 ……なるべきが故に
ア(神)デオス エル(怒)セル(の)アル オメオブ(作)ル(を)アル(人)ガツ(人)
ける神 人間を作りけむ其(時)に於

アログプ。 若くは、然らざれば――右のアルから導かれたのであらう。

エ(エン)。 前提句と歸結句との連繫に用ひられる。順逆兩用で、場合によつて「然るに」又は「然れども」とも、「而して」又は「然らば」とも譯せられる。前者の用例は既に動詞の假設法の項下にあげ

たから、左に順の歸結を導く一、二例を補足する。

ア(我)クムラ(了)ラ(ル)・ア(我)ゲイ(岩壁)エル(於)ゲリ(昨日)、エ(面)ゲイラガン(今日)ゴケルレク(我)アムロン(了)

私は昨日釣に出た。而して今日は私の弟が行つた

ン(其)ク(甚)ママル(堅)メツク(面)エメシシイグ(強) 其は甚堅く且強い

右の外次章文例中にも多くの用例が見える。時としては之に次句の主格たるべき代名詞ン(彼、

其)を接合してエンとすることがある、例

ン(其)ムラ(了)ラ(ル)・ア(我)セルセク(面)、エン(面)チレマルル(破響)アベトク(多)エル(の)デルレメルク(我)

其は私の垣内に居た。而して私の作物の多くを荒した。

エソロン 乃で――副詞ソロンに右のエを接頭したものであらう。

エル(ル)。 上記のエと國語の「の」又は「こと」に當るルとが結合したもので、其前後の二語が互に關聯するものなる事を表示する。パラウ語に於ては既記の如く、連繫語なくして(或は冠詞アを介して)二語を排列すると、前者は主語、後者は述語となるから、――次章参照――然らざる場合にはエル(暑してルともいふ)を介する事を必要とする。此意味に於てエルは國語のノ(ガ)と頗る

趣を同うし、其故に之に相當するルといふ語分子が用ひられるのであるが、其用途は遙に廣く、「に」「を」「で」「於て」「より」「から」等あらゆる關係を表示するので、其いづれに當るかは文脈によつて判斷するの外はない。此事は既に名詞の項下にも述べ、其例はこれまでに多く見えたから、之を省畧する。——其外にエルは名詞節の構成にも用ひられ(次章参照)、他語と連ねて助語を形成すること後記の通りである。

エレ(ン)。右のエルに更にエを連ねたもので、「エエエなるが故に」といふ意に用ひられる。獨立形としては之にンを接尾する。

オバ。動詞オバン(取レ之)の語幹で、之と右のル(エル)を連ねたル オバは「以て」といふ意を表現する。例

ア^(我)ク メ^(食)ナ ル^(以て) オバ タオ^(肉又)ヅ 私は肉又で食ふ
ア^(我)ク ゴレ^(善)ベダウ ル^(以) オバ ギイ^(腕)マク 私は自分の腕で汝を殴つ

オベンゲク(コベンゲク)。右のオバンら出た語で、常に代名詞を添へて用ひられ、人稱によつて變化する。オベンゲクは其第一稱で、音便によつてコベンゲクともなるのである。此語も亦エ

ルと連ねて用ひ、「以」の意から轉じて「共」を表する。例

ア^(我)ク モ^(行)ル ア ベ^(村)ル エ^(て)ル オベン^(共)ゲル ア ゴ^(人名)リゴン 私はゴリゴンと共に村に行く
ア^(我)ク ゴ^(食)リ グ^(食)カウ ル オベン^(共)ゲル ア ニ^(魚)ゲル 私は魚と共にタロ芋を食ふ

「集在」の意は自動詞ヅマク(過去形ヂラク)を以て表示せられ、其他動詞オルダク(集結する)の過去名詞形ウルテキアルは「共」といふ意にも用ひられる。例

テ^(彼等)ヂ^(二語なりき)ラク エ^(迄)ルモ ア ナ^(地名)ルミヅ 彼等はナルミヅまで同行せり
ア^(我)ク ゴ^(食)リ グ^(芋)カウ ル ウ^(共)ルテキアル ア ニ^(魚)ゲル 私は魚と共にタロ芋を食ふ

クヌモ。既記の如く「好」といふ意味の語幹であるが、上記のエル(ル)と連ねて句を承けるに用ひられる。——此場合は國語の「と」に相當する——例

ヂ^(唯)・メ^(來) ル^(と) クヌモ ミミミとだけ
ア^(酋長)ルバク ア^(了)ヂル ル^(と) クヌモ ボ^(行)ル ア マ^(地名)ラゲル 酋長はマラゲルに行けというた

ナル。「在」の意の體言であるが、ウガイ(前)、ウリウル(後)、カヅル(左)、カヂクム(右)其他副詞に流用せられる諸語に冠し、國語の「に」に相當する用をなすことは既に前項に述べた通りであ

る(第一四九頁参照)。

ベヅル。「頭」を意味し、常に代名詞を接合して用ひる名詞であるが、エル(又はエル・モ)と連用せられる場合には「向つて」といふ意の前置詞になる。例

モルルオグ(終止形メルルオグ) エル(頭)の) ベヅル(我) ナク 汝我に對つて乞へ

アク(我) メラエル(行) ル(迄)の) モ(頭)の) ベヅル(地名) ナルミヅ 私はナルミヅに向つて行く

マ・メン。マは國語「と」に當る助語で、「及」の意に用ひられ、メンは之に上記のエン(連繫助語)を結合したものである。其例は既に屢々見えた通りで、數詞に在つてはマは國語の「餘」と同様に二位數以上の連繫に用ひられる。——其頃下参照——又ウクル(根元)といふ語を用ひる場合之と次句とを繋ぐ用に供せられることがある。例

ナラ(何) ウクル(根元) マ(メン) 何故に

チアイ(此) ア ウクル(根元) メン 此故に

メ(メイ)。「此方へ来る」といふ意味から轉じて國語の助語「へ」と同様に用ひられることがある。但し次のモと方向が相反することに注意せねばならぬ。時としては上記のエルを冠して用ひる。

例

ナラ(ナル・ア) ^(北)ヂルゲス ^(北)エル ^(此方)メイ 北から此方へ

又次のやうにも轉用せられる。

アク(我) ^(子)ムラ ^(來)メイ ^(四)エル ^(夜)エオア ^(の)ル ^(夜)クレベセイ 私は四夜(四日)以來(ムム)に居る

グロイ(由) ^(來)メ とよとなるが故に

モ。一般的に「へ」(方)を表現するに「行」といふ意のモを用ひることは既に副詞の項下に例示した通りで、次の如くも用ひられる。

モ(何) ナラン 何の爲か

上記のエルに此語を連ねたエル(ル)モ及之を反復したエル(ル)モ ルモは「迄」といふ意を表示する。例

エル(から) ^(此處)チアン ^(迄)エルモ ^(北)ル ^(村)アベル 此處から村まで

エル(から) ^(朝)ア ^(迄)ツタウ ^(迄)ルモ ^(七つ下り)カベセネイ 朝から七つ下りまで

ことがある。例

ツムルク^(止) エル^(E) ア^(目) サンデ 日曜まで

モロゴン^(行) (モ・ロギルの約轉)。「終つて」といふ意に用ひられる。例

モロゴ^(終) メルゲス^(著) エ^(我) アク^(我) メイ^(來) 書き終つて私がある

ル。上記エルの原語で、國語の「の」にあたり、多くは他語に接合せられるが、獨立助語としてはチアル^(此) クラロ^(物) (此物)、ア^(二) タ^(の) ルガヅ^(一) (一人)の如くも用ひられる。——エルも亦略せられてルとなる場合のあることは上述の通りである。

右の外動詞メリウクル(頭活終止形)を「廻」の意を以て前置的に用ひることがある。

八、感動詞

感動を表示する自然の聲はア、オがあるのみであるが、次の言葉は感動詞的に用ひられる。

オ・ロコイ! 驚愕 ア・ガヂイル^(母) 嘆賞

アキ! アカイ! 疼痛 ガシレク! 嫌惡

クノプ! 惡臭 エアク! 不興、不耐

イオイ! ガデウル! 恐怖

アリ! 脅迫——「覺えて居れ」といふ意。常に句頭に用ひられる。例

アリ! コム^(若) ルウト^(汝) エル^(反復) モ^(行) ル^(E) ア^(禁惡) ムグルル 若し汝が今一度禁忌を犯せば承知せぬぞ

第四章 文

一、語の排列

排列様式。 文は單語の排列によつて構成せられるものであるが、其排列には二様式がある。即ち單に所要の單語を(要すれば冠詞アを添へて)並列すれば足りりとするものと、或る助語を介して之を連繫することを必要とするものである。後者は其助語の前後に位する言葉が互に或關係を以て聯結せらるるものなること既に前章助語の項下に述べた通りである。以下屢々之に言及する必要があるので便宜の爲め第一排列様式、第二排列様式と稱へて區別する。

第一排列様式即ち連繫助語を介せざる場合には前續語は主語、後續語は述語を表示するものと了解せられる。然らざる場合には兩者は同位格に立つのである。例

ア ^(名)ネクレル ^(彼)ア ^(主語)オット ^(述語)彼の名はオット(なり)

ア ^(我)レミイヅ ^(出發)我出發す

カウ ^(我)ケ ^(我)メラエル ^(行)汝 ^(同位)汝は行くか

最も簡單なる文は此様式を以て表現せられ、左記の如き稍々複雑なる文章に於ても之を以て構成の骨子とする。

ア ^(名)ナクレル ^(此)ニガル ^(の)ナルク ^(子)ア ^(主語)オット ^(述語)此の子の名(は)オット(なり)

ナク ^(我)マ ^(及)デマク ^(我)ア ^(建)メルラサク ^(家)エル ^(を)ア ^(主語)ブライ ^(述語)我と我父家を建つ

右の二例に於けるル、エル、マは連繫助語であるから「ア ナクレル ニガル ナルク」「ナク マデマク」及「アメルラサク エル アブライ」といふ語群は各一個の名詞節として主語及述語を形成するのである。

排列の順序。 上記二例に於ける語排列の順序は「名の此の子オット」「我と我父建つを家」の如く之を國語に比較すると大に趣を異にする。尙左に若干例を擧げる。——括弧内の言葉は原文には見えぬが、國語に譯するに當つては之を補うて了解すべきものである。

〔一〕 ナラ ^(何)ナル ^(中)ガルセル ^(其)セル ^(の)スアロ? ^{(四)(五)(六)(三)(X)(D)(I)}其の籠の中に何(がある)か

文

- 〔一〕 アク^(我) ミルサ^(子見之) (ミルサンの約) ゲイモ^(一箇) ル^(の) ガルム^(動物) エル^(の) スエベク^(飛) エル^(なる) ク^(甚) マル^(美) ウニ^(美)
- ル 我^(二) 甚^(九) 美^(一〇) なる^(八) 一個^(三) の^(四) 飛行^(七) の^(六) 動物^(五) (鳥) を^(二) 見た^(一)
- 〔三〕 アル^(人) メケツン^(善良なる) ア^(好) ソアル^(の) ア^(神) チオス^(順良なる人) (は) 神^(四) の^(三) 好^(二) (む所なり)
- 〔四〕 ナラゲル^(何處) ア^(時計) クロク^(の) エル^(汝) カウ?^(汝の時計) (は) 何處^(四) に^(三) (ある) か
- 〔五〕 ムロ^(彼) ル^(子行) ゲル^(何處) ア^(少年) ブイク?^(少年彼) (は) 何處^(四) に^(三) 行つたか
- 〔六〕 ア^(子) ネレケル^(の) アル^(人名) ・ヂアルル^(舟人の意) (は) 何處^(四) に^(三) 行つたか
- ベル^(村) 其處^(八) の^(九) 村^(一〇) の^(七) 第二^(四) の^(五) 酋長^(六) なる^(三) アル^(二) ・ヂアルル^(一) の^(二) 子
- 〔七〕 ムイア^(汝) (ロイアンの命令法) エル^(其處) セイ^(迄) ルモ^(ル) ア^(上而) ウラオル^(其處に土間にまで置け)
- 〔八〕 ア^(舟) ムライ^(其) ン^(ナラナル) ナラ^(枕木) (は) 舟^(二) 其^(三) (は) 枕木^(四) (の) 上^(三) に^(二) (ある) か
- 〔九〕 不^(不) デアク^(我) ク^(云) ツ^(何) ア^(私) ナラン^(私) (は) 何^(四) (も) 云^(三) はぬ^(二)
- 〔一〇〕 ン^(其) ウアナラ^(如何) ア^(高) クル^(高) ヂ^(の) デウル^(此) チ^(家) アル^(の) ブラ^(家) イ^(此の家の高) 其^(二) 如何^(一)
- 〔一一〕 テ^(彼等) メルウル^(作) ア^(誰) ペイガイ^(誰) エル^(て) グテム^(主) 彼等^(二) (は) 土^(五) で^(四) 甕^(三) を^(二) 作る
- 〔一二〕 ゴム^(汝) メセス^(汝) エ^(面) ・ム^(從順) ケツン^(二) エル^(四) オレ^(之) ネス^(ア) ト^(言) ゴイ^(我) アク^(與) メスカウ^(汝) ア^(十個) タゲ

ル ドロボグ^(珠寶) エル^(二) ア^(の) タル^(月) ブイ^(月) エル^(若し汝が勤勉にして) (且) 汝^(五) が^(九) 言^(八) を^(七) 聞くこ

- と^(六) 從順^(一〇) (ならば) 我^(一) 汝^(二) に^(三) 一^(四) ケ^(五) 月^(六) 十^(七) 個^(八) の^(九) 珠寶^(一〇) (を) 與^(一) へ^(二) む
- 〔一三〕 ナル^(在之) ニ^(之) エル^(我) ナク^(我) ア^(我) ゲテ^(我) コルル^(及) マ^(衣) バル^(及) 我^(二) に^(三) 褌^(四) 及^(五) 衾^(六) 之^(七) あり
- 〔一四〕 ア^(衣) ビレク^(我) マ^(珠寶) ウツ^(我) デク^(在之) ナル^(我) ニ^(及) 我^(二) 衣^(三) 及^(四) 我^(五) 珠寶^(六) 之^(七) あり

譯文の右傍の數字は原文の語排列順序を表示するものである。右の外に特異の序列を用ひる場合もあるが、尋常の表現法はこの諸例に網羅せられ、略々左記の通則に従うて排列せられるものゝやうである。

- (イ) 主語は先行し、述語は後續することを原則とする。
- (ロ) 主語と同位格に用ひられる代名詞、名詞又は名詞節は句頭(第八例及第一排列様式の例)又は句末(第五、第一〇例)に位する。
- (ハ) 動詞は常に目的格に先行する。
- (ニ) 附庸的に用ひられる數詞及形容詞は名詞に先行することを例とするが、形容詞に在つては稀に後續する場合もある(第三例)。

(ホ) 假設語分子ア(ゴ)、否定語デアク(過去形ヂムラク)並に疑問文に用ひられる疑問語は常に句頭に位する(第一、第九、第一二例)。爾餘の副詞の位置は一定せぬが、後記の場合の外は動詞に先行するを例とする。

(ヘ) エルを以て連結せられる修飾、限定又は補足語は常に後續する。

(ト) 助語は前置詞的に用ひられる(第七例)。

(チ) ナルニ(在之)といふ語は句頭又は句末に置かれる(第一三、一四例)。

即ち大體の原則は他のミクロネシア諸語と同様であるが、尙微細の點に於て異同のあることに留意すべきである(ch八〇頁以下、m一一八頁以下参照)。

二、主 語

主語として用ひられる品詞は名詞及代名詞に限り、——他の品詞が之に充當せられる場合には准名詞と見なすべきこと後記の通りである——述語に先行することを例とする。名詞に在つては直接又は間接に冠詞アを添へ(前章名詞の項下参照)、或は指示代名詞を冠する。例

ア ^(名)ネクレク ア オット 我名(は)オット(なり)
 ア ^(舟)タル ^(舟)ムライ ア ^(大)クロウ 一舟大(なり)
 チア ^(此)ル ^(物)クラロ ア ^(甚)クママル ウニル 此物甚佳
 ニラガ ^(其)ル ^(人)ガヅ ア ^(了)ヂル 其人(が)いうた

人稱代名詞は既述の如く獨立形と連用形(三種)とが之に用ひられるのであるが、兩者の間には用法上大差があることを知らねばならぬ。即ち獨立形は全然上述の名詞と用法を同し、——アを冠する事はないが、強意の爲め時としては語分子イを接頭する——連用形は直接動詞に連る場合にのみ用ひられる。其故に述語が准名詞を以て表現せられる場合(後記参照)には決して之を用ひることはない。嚴密にいへば此形は本初主格を表示したものでなく、指示代名詞の連用形即ちニガ^(此)(人)、セ^(其)(物)等語尾にン、イを添付せざる形式に相當し、或連繫語を介して述語に連用せられたのであるが、連繫に用ひられたウ、オ等が動詞に接着して特別の終止形を形成するに及び、主語として之に直接するものであるかのやうな觀を呈したのである。

之に反して名詞及獨立形代名詞は決して直接動詞に連ることはなく、上例のやうにアを介して述

語を名詞化するか、若くは更に連用形人代名詞を重ねて主格を代表せしめ、之が同位格として句頭若くは句末に排列する。例

ア ^(會長)ルバク ^(彼)ン ^(善)コレバダク ^(我)酋長、彼は私を答つ
^(彼)ン ^(子)ムロ ^(行)ル ^(何處)ゲル ^(少年)ア ^(少年)ブイク？ 少年、彼は何處に行つたか
^(汝)カウ ^(汝)ケ ^(書)ル ^(之)ゲシ？ 汝、汝は之を書くか

人代名詞の獨立形が主格として用ひられる場合の極めて稀なのは之が爲であるが、尙次の如くもいひ得ることは勿論である。

ナク ^(我)ア ^(大)クロウ ^(より)エル ^(汝)カウ ^(我)私は汝より大い
^(其)ン ^(十)トリオグ ^(餘)マ ^(五)ゲイム ^(其)其は十五(である)
^(彼等)テ ^(人)デイ ^(三) 彼等は三人(なり)
^(其)ン ^(今)ゲイラカン ^(の)ル ^(日)シルス ^(其)其は今日(である)

動詞(形容詞)以外の品詞が述語となる場合に於ても右に準じ、直接人代名詞に連ねる爲には主格として連用形が用ひられる。例

^(其)ン ^(如)ウア ^(何處)ゲル ^(日)ア ^(日)シルス ^(日)日、其はどの邊か——何時か
^(其)ン ^(輕)ベオト ^(價)ア ^(價)ガル ^(價)價、其は輕し——値が安い

假設及打消語法に用ひられる連用形人代名詞が特別の形を備へて居ることは既に前章に述べた通りであるが(第七二頁)、其が所有代名詞から分化して居るのは會々連用代名詞が本來所有格を表示する一形式であつたとする上述の推斷を旁證するものである。國語に於ても「我が衣」「彼の家」等です、ガは「我が見る」「彼のいふ」の如く用ひる場合には主格を表示することを思ひ合はすべきである。——前章「動詞」假設及打消法の項下参照。

指示及疑問代名詞に在つても之と同様に、獨立形は主格にも爾餘の格にも用ひられるが、連用形は直接述語につゞいて主格を表示するか、或は名詞に先行して附庸的に用ひられるのである。例

^(此)ニガン ^(誰)タガン？ ^(誰)此は誰か
^(誰)タガ ^(名)ネクレム ^(汝)誰が汝の名か(汝の名は誰か)
^(此)ニガン ^(友)ア ^(我)サゲリク ^(此)此(人)は我友
^(此)チア ^(の)ル ^(物)クラロ ^(其)ン ^(佳)ウニル ^(佳)此物、其は良

文

チリゲ^(其等) ル^(の) メゲゲレイ^(小) ル^(の) ブイク^(少年) ア ウレメテグ^(子) エル^(を) ナク^(我) 其等の小さい子供が私
を投げた

名詞及代名詞以外の品詞も亦准名詞として主語に用ひられることはあり得るが、多くは同位格たる代名詞をそへて之を表示する。例

ゲロレム^(六) エル^(の) エイム^(五) ン^(其) オゲデイ^(三十) 五の六倍、其は三十

三、述 語

名詞は單に之を主語に後續することによつて、——換言すればアリ(タリ、ナリ)の如き助動詞を介することなくして——述語と了解せられることは上記の通である。名詞以外の品詞(代名詞、形容詞、數詞、動詞等)も亦之に準して述語の用に供せられるが、其はいづれも准名詞と見なされた爲で、代名詞の外は常に冠詞アを接頭することを要するのである。例

ア^(名) ネクレク^(我) ア^(オット) オット^(名) 我名はオット
ア^(舟) ムライ^(ア) クロウ^(大) 舟(は)大(なり)

ナク^(我) ア^(誰) ゴレタ^(數) 我一人(なり)
ゴレス^(小刀) ア^(子) リリイヅ^(矢) 小刀(が)紛失した
ニガン^(此) タガン^(誰) 「疑代」? 此は誰か

右は文構成の原則であるが、上述の如く連用形代名詞が主語の位置を占めると同時に、動詞の終止形が之に接續して名詞形ならぬ述語を形成し、形容詞及數詞も之に準じて用ひられるやうになつた。之が爲に他動詞に在つては頭活形が發達し、在來の尾活形と並用せられ、隣民族語に類のない複雑な活用を生じたのであるが、言語學的には一段の進歩たることはいふまでもない。

此種の述語を用ひる場合特記すべき要點は左の諸項である。

- 一、主格は常に代名詞(連用形)たることを要する。之によつて代表せられる人事物を明示する必要がある場合には同位格として用ひる。——第一七二頁第五、第八、第一〇例参照。
- 二、動詞は自動詞に在つては原形、他動詞に在つては頭活及尾活形を用ひ、形容詞は常に原形を之に充當する。——後記諸例参照。
- 三、主語と述語との間に他語の介在することを許さず、冠詞アを用ひることは絶無である。其故

に常用數詞を述語に用ひるに當つては冠詞ア及之に相當するガ行の子音は除かれる。例
 ン^其 タン(獨立形アタン) 其は一つ(なり)
 ン^五 エイム(獨立形ゲイム) 其は五つ(なり)
 ン^{三〇} オゲデイ(獨立形ゴゲデイ) 其は三十(なり)

右の如くパラウ語に於ては同一思想を表現するに名詞形述語を用ひるものと、活用形述語を用ひるとの二様式が存し、他動詞に在つては活用形が更に頭活と尾活とに分たれるのである。例

ア ナルク^(子) ア^(彼) メギウアイウ^(眠) [自] 小兒は眠る
 ア ゲゲビル^(親) ン^(彼女) ゴイテクリ^(善) [他] 小娘は謠ふ
 ン^(子) ミルサン^(老) [他] 我父之を見る
 ダマク^(父) ン^(我) ミルサン^(彼) [他] 我父之を見る

ン^(を) オレメス^(其) エルニ^(其)
 ア ムライ^(舟) ア^(大) クロウ^(形) 舟大(なり)
 ン^(其) クロウ^(大)
 ア ブライ^(家) ア^(其) キヂダイ^(形) 家高し
 ン^(其) キヂダイ^(其)

日常會話に於ては成るべく簡単な形式を選ぶことは勿論であるが、名詞形述語が活用形述語よりも古い形であることを辨へねばならぬ。

四、節

單純な主語と述語との外に副詞其他の補足語を必要とする場合が多い。間接に動詞又は形容詞を支配する副詞は多くは句頭に位置するのであるが、其直接に連用せられるものは他の補足語と共に主語又は述語の一部分を形成するものと見なすことが出来る。されば本章では説明の便宜上、多數の單語の排列から成る一文を——副詞が句頭に位する場合を除き——二つに分けて之を主語節及述

語節と稱へる。

主語節は上記の單純なる主語と同じく多くは直接述語に連ることなく、連用形代名詞(主格)の同位格として、句頭又は句末に位し、指定、修飾又は限定語を添加することによつて構成せられる。此等の添加語は通例附庸的に用ひられ、主語に先行するのであるが、時としては助語エルを介して後續することがある。例

ニゲル(の) ブイク(少年) ンガツ(彼) エル(の) ゲル(何處) 彼の少年、彼は何處の人か

ア(多) ベトク(の) エル(椰子) リウス(椰子) アメツル(燒失) 多くの椰子焼く

テプロ(二箇) ル(の) マルク(鶏) アギレシ(値) ア(二箇) ゲイモ(の) ル(の) ドロボク 二羽の鶏は一個の珠貨を値

する

ア(子) ネレケル(の) アル(人)・ヂアルル(人名) エル(第二) オケル(の) ル(酋長) エル(の) イセ(彼處) ル(の) ベル(村)、

ン(彼) マツ(死) 彼處の村の第二酋長なるアルヂアルルの子(彼)死す

ア(家) プライ(の) エル(我) ク(了) ウラサル(了) エル(を) ニ(其) ア(了) ムルン(倒)グル 我が工作したる家(其)は倒

れたり

最後の二例のエルは其用法西洋語の關係代名詞に類するものがあるが、其本質に於ては前例のエル(ル)と少しも異なる所はなく、國語に譯するには相當動詞の連體法を用ふべきものである。

述語節に於ても指定、修飾、限定語の用法は右と同様で、動詞を用ひる場合には之に目的格又は若

干の補足語が加はることを異りとするのみである。例

チアン(此) ア(二)・タ(の) ラ(の)・ア(集會屋) バイ(集會屋) 此は集會屋の一つ(である)

ナラ(何) ネクレル(の) チア(此) ル(の) ゲルレガル(木)? 何が此の木の名か——此木の名は何か

ン(其) メヅク(堅) エル(の) ゲルレガル(木) 其は堅い木(である)

ゲル(家畜)メム(汝) エル(の) バビ(豚) ン(其) チレマルル(破滅) ア(多) ベトク(多) エル(の) デルレメルク(作物) 汝の蓄豚(其)

は我が多くの作物を荒した

ア(我) ク(了) ウレメス(見) エル(を) チル(彼等) 私は彼等を見た

ヂ(不)ア(能)ク(我) ア(能) セベゲク(能) エル(了) メリゲス(棹) 私は棹さすこと能はぬ

テ(彼等) バヅ(風) エル(了) ア(集會屋) バイ(集會屋) 彼等はバイに寝る

ン(彼) ル(書)ゲシ(之) エル(了) ゴルグス(鉛筆) 彼は鉛筆で書く

文